

ころろ12～『ころろ』の意味は朦朧～

いずれにしても先生のいう罪悪という意味は朦朧（もうろう）としてよく解らなかつた。

（夏目漱石『ころろ』）

はじめに

（文豪伝説の終わりに）

知ったかぶり養成ギブス『ころろ』

1 『ころろ』は意味不明

なぜか文豪と称されてきた夏目漱石の代表作とされ、なぜか日本人の必読書のようにみなされてきた『ころろ』を、私は批判する。

どのように批判するのかというと、〈『ころろ』は朦朧としている〉とって批判する。作品の主題とか作家の人生観とか、そういったものを批判するのではない。芸術的価値を論じようなどといった大それたことを企てているのでもない。作中人物に対する嫌悪感を表明したいのですらない。そうした批判や非難などは一切不可能なのだ、『ころろ』は意味不明だから。

私が〈意味不明〉というときの〈意味〉という言葉が指すのは、ある表現に接したときに万人が同じように思い描く内容のことだ。言外の意味なども含まれはするが、推理によって万人が同じ結論を得る場合に限られる。ある情報を受け取る側の個人的な思想や感情や立場などがどのようなものであれ、その情報の意味は同じだ。ある人にとって意味のある表現が別の人にとって意味不明であることは勿論ある。だが、〈これには意味がある〉と思う人の間では、その意味は同じだ。いや、そのように信じられるものが〈意味〉だ。実際には、人によって意味が違うことはある。だが、ある個人は〈誰もがみんなが同じ意味に取っている〉と思うものだ。〈ある表現を自分とは違う意味に取る人がいる〉という事実を知ったら、びっくりする。

私たちは、〈ある言葉の意味は共有されている〉と信じていなければならない。さもなければ、言葉は詩歌を作るときを除いて、何の用も足さないことになる。その詩歌というのも、アバンギャルドだ。そうでもないとしたら、たわごと。

たわごとの例を挙げよう。

「事実で差支（さしつかえ）ありませんが、私の伺いたいのは、いざという間際という

意味なんです。一体どんな場合を指すのですか」

(上29)

私は〈意味〉という言葉で「場合」という意味では用いない。この台詞を口にしていない人物は、「意味」という言葉をわざわざ「場合」と言い換えているようだが、困ったことに、この台詞において「意味」を「場合」に置き換えることはできそうにない。〈「いざという間際という」「場合」〉という言葉が日本語として通用するとは、私には思えない。だから、「場合」という言葉の意味も怪しいことになる。そもそも、「いざという間際」という言葉の意味がわからない。〈いざというとき〉ならわかる。しかし、〈「いざという」ときのその「間際」〉という時間を想像することはできない。「間際」は〈瀬戸際〉という意味かもしれないが、断定はできない。要するに、この台詞は意味不明だ。

なお、本文では、この台詞の前後に対話者の台詞があって、それらの台詞も意味不明だ。したがって、前後関係から意味を推定することもできない。この場面で会話が成り立っている様子はない。二人は互いに意味不明の言葉を並べている。彼らの会話の内容が理解できないのは私だけではない。彼らも互いに相手の言葉が理解できていない。〈二人は親しい間柄〉という設定だが、まるで敵同士のように対峙している。「いざ」と言い合っているみたいだ。喧嘩腰。つかみ合いが始まる間際。一触即発の状態。無駄に緊張が強まっている。口の利き方がなっていないせいだ。しかも、〈作者は読者を笑わせようとして、わざとたわごとをこしらえている〉というふうには思えない。不気味だ。

『こころ』の随所にこうした意味不明の言葉が見つかる。すらすらと読むことなど、私にはできない。でこぼこ道をおんぼろ車で走っているみたいだ。いつひっくり返るか、知れない。実際、話がひっくり返ることもある。

『こころ』はよくわからないけど、いいんだよね」と言いたい人は勝手に言えばいい。〈けど、いいんだよね〉の部分は無視できる。〈よくわからない〉という部分が重要なのだ。この部分を少なくない人と共有できそうに思えたとき、私の話は終わる。

2 文豪伝説を疑う

私が批判するのは、『こころ』の意味だけならば中学生にも理解できる)といった伝説だ。〈研究論文や文芸批評などを読んでみなければ『こころ』は理解できない)というのが日本人の常識なら、批判しない。私が批判したいのは『こころ』は基本的に明快であり、解釈の余地はあっても、誤解の余地はない)といった類の伝説だ。

伝説とは異なり、『こころ』は意味不明だから、作中の出来事はぼんやりとしか思い描けない。きちんとした結末がなく、読み終えても確かな読後感は得られない。解決していないことが山ほどありそうに思える。そもそも、解決すべき問題が何なのか、よくわからない。作品の内部の世界における常識と非常識の区別がつかない。だから、読解のための足

場が作れない。文字盤のない時計のようなものだ。針が何を指しているのか、わからない。嘘と間違い、本気と冗談、夢と現実、過去におけるリアルタイムの印象と語りの時点での回想の区別が困難だ。見かけは比喻のようでも、比喻になっていない。比喻のために持ち出された事柄と比喻されている事柄の両方が十分に語られていないせいだ。出来事が奇妙なのか、それを語る語り手の言葉遣いが混乱しているのか、その両方なのか、判断できない。写真にたとえよう。被写体が揺れているのか、カメラがぶれているのか、その両方なのか、そうした判断ができない。現在の義務教育で教わる文法では説明できない言い回しもよく出てくる。あらずじすらつかめない。《『こころ』のあらずじ》と称するものはいくらでも出回っているが、それらは本当のあらずじではない。普通に読んで理解可能な部分をつぎはぎしたものでしかない。予告編のようなものではあっても、要約ではない。

以上、私は簡単なことを述べてきた。本当に簡単なことなのだ。『こころ』が意味不明であることぐらい、誰にだってわからなければならない。私の想像を超えた天才的な読解力の持ち主は別だろうが、そんな人でも《『こころ』を理解できるものは俺様ぐらいしかいない》と思わなければならない。

私が本当に批判したいのは、『こころ』そのものではない。『こころ』を意味のあるものとして推奨してきた人々の日本語の技術と心底だ。その人々とは、評論家や研究者に限らない。素人も含まれる。教養、思想、信条、趣味などとは一切無関係だ。

3 神のように語る「私」

意味不明の文を挙げよう。

Kと私は何でも話し合える中（ママ）でした。

（下29）

何でも話すことは不可能だ。だから、何でも話し合うことはできない。何でも話し合えることなどありえないから、そんな「中」もない。したがって、この文から確実に思い描ける事柄は何もない。ただし、無意味とまでは思えない。意味はありそうだ。つまり、この文は意味不明なのだ。

こうしたことが了承できない人の日本語の技術と心底を、私は強く疑う。

この文が私にとって意味不明なのは、私が百年前の日本語をよく知らないせいかもしれない。だが、多くの人が百年前の日本語をよく知っているとは思えない。この文は、現在の日本語と同じ種類のものと思われているのだろう。そして、意味があるように誤読されているのだろう。だが、どんなふうに誤読されているのか、私には想像できない。

ところで、『こころ』論の伝統では、この「私」を「先生」と表記することになっている。私はこの悪しき伝統を継承しない。この「私」を「先生」と表記すれば、この「私」は「先

生」という呼称にふさわしい人物だ」という文を真実として受け入れたことになってしまふ。ところが、この文は真実ではない。虚偽ですらない。この文は意味不明だからだ。「先生」という言葉の『こころ』における意味は不明なのだ。

「Kと私」の文の検討に戻ろう。この文に意味があるとすれば、私たちは次のように言葉を補わなければならない。

〈「Kと私は」両者のいずれかが話し合いたいと思っていることならば「何でも話し合える中でした」〉

このように語ることを、「私」はためらっている。ためらうのは当然だろう。「私」にKの本心を透視する力はないはずだからだ。

「何でも話し合える中」では、次のことが成り立っていなければならない。

I Kは私の話したいことを何でも聞いてくれた。

II 私はKの話したいことを何でも聞いてやれた。

Iに関して、「私」は自分の責任において真実として語るができる。だが、IIは違う。〈Kの話したいこと〉を「私」が知ることは不可能だからだ。この文を普通に意味のあるものにするためには、次のように書き換えなければならない。

III 私は（Kの話したいことを、Kが話してくれさえすれば、何でも聞いてやれる）と空想していた。

IとIIIを合成し、さらにKの立場も考慮すると、本文は次のようではなければならない。

〈Kは私の話したいことを何でも聞いてくれたし、私は（Kの話したいことを、Kが話してくれさえすれば、何でも聞いてやれる）と空想していた。Kと私はそういう仲でした〉

どういう仲だろう。「私」はKに甘えていた。そして、Kが「私」に甘えてくれるのを待っていた。ところが、Kの本心は、「私」には察知できなかった。その程度の仲だ。その程度の仲を親密な仲に偽装しようとして失敗したのが本文だ。「私」は「親友」（下24）ごっここの舞台裏を隠蔽しようとして逆に暴露してしまった。語るに落ちるとはこのことだ。

「何でも」の文が意味不明なのは、第一人称で語られているせいだろう。この文が語るうとして失敗したらしいことを第三人称で語ると、次のようになる。

〈Kたちは何でも話し合える仲でした〉

このように語ることが許されるのは、何でもお見通しの神のような語り手だけだ。では、語り手の「私」は神のような人物なのだろうか。あるいは、自分を神のような人物だと勘違いしているのだろうか。どちらでもなさそうだ。ところが、神のように語っている。だから、意味不明。

〈お互いに話し合いたいことは「何でも」話し合っている〉と、当時の「私」が思い込んでいたとしても、Kは違う印象を抱いていたのかもしれない。Kは〈こいつは僕と「何でも話し合える中」みたいに振舞うから鬱陶しいな〉と思っていたのかもしれない。〈甘えんじゃねえよ〉と叫びたいのを我慢していたのかもしれない。Kの不満が、当時の「私」にはまったく感知できなかったのかもしれない。そうではなかったのかもしれないが、そうだという可能性は十分にあるのだから、それを考慮しなかった当時の「私」はかなりの独りよがりだったのだろう。また、〈かつての自分は独りよがりだったのではないか〉といった反省をすることができないとしたら、語り手の「私」はあまりにも粗忽だろう。

「何でも」の文に引っかからない人も、独りよがりなのではないか。〈私たち、親友だよね〉みたいなことを平気で口にして相手が苦笑しているのに気づかない人なのではないか。

重箱の隅をつついてるように誤解する人がいるかもしれないが、この「何でも」は重要な言葉だ。「Kと私」が本当に「何でも」腹藏なく話し合える仲だったとしたら、Kの自殺という出来事は起きなかったと思われるからだ。

本文を読む限り、彼らはインテリ弥次喜多でしかなかった。

「議論はいやよ。よく男の方は議論だけなさるのね、面白そうに。空の盃でよく飽きもせず献酬（けんしゅう）が出来ると思いますわ」

（上16）

この台詞を口にした女性が聞いていた「議論」とは「Kと私」のものだろう。

しかし、「議論」は褒めすぎ。二人は言葉による席取り遊びしかやっていない。なお、この女性は聡明だという設定になっているが、この台詞は女性の想像力の限界を表現したものと推測される。「議論」めかした席取り遊びに血道をあげる男たちの無残な心情が、彼女には想像できないわけだ。

さて、当時の「私」は、〈「Kと私は何でも話し合える中」だ〉とKに思い込ませるのに成功したのかもしれない。だが、実際にはKに対して隠し事をしていた。あえて誤解されるような話し方をしてもらった。語り手の「私」はそういう事実をいくつも語っている。そのくせ、こんな文を作る。奇妙だ。

4 知ったかぶりについて

「何でも」の文は、これだけを作品から切り離して読んだ場合、ありえないことを語っている。ところが、本文では、〈語り手の「私」はありえないことを語っている〉という表現にはなっていない。だから、この文は意味不明だ。

意味が通じるように本文を書き換えると、次のようになる。

〈当時の私は、(Kと私は何でも話し合える仲だ)と勘違いしていました〉

こうした書き換えが妥当だとしても、これを本文の意味として認定することはできない。認定するには、本文がこのように表現されなかった理由を示さなければならないが、その理由は不明だからだ。

当時の「私」は勘違いをしていたとしよう。では、なぜ、その真相を語り手の「私」は暴露しないのだろうか。いまだに自分の勘違いに気づいていないのだろうか。こうした問題に対して明快に答えることはできない。したがって、この「私」を語り手として信用することはできない。

語り手の「私」が嘘つきである可能性は非常に大きい。嘘つきでなければ、日本語をよく知らない人なのだろう。ただし、こうしたことだけで『こころ』の読解が困難になるわけではない。『こころ』はノンフィクションではないから、怪しげな語り手が登場しても差し支えない。『ほらふき男爵の冒険』(ビュルガー)の語り手はほらふきだが、そのことによって読解が困難になるわけではない。作者が語り手を「ほらふき」として描いてくれているからだ。では、『こころ』の場合、どうだろう。『こころ』の作者は、語り手の「私」を信用できない語り手として批判的に描いてくれているのだろうか。不明。作者は語り手の隠蔽工作に加担しているのではないか。そのように疑われても仕方がない。

何と怪しげな作品だろう、『こころ』は。

この百年、日本人は知ったかぶりをしてきたようだ。

〈知ったかぶり〉とは、疑問があるのに無視してしまう行為をいう。ちょっとばかりものを知っただけで嬉しくなって自慢するような、おめでたい人の発言などを指すのではない。自分の無知に気づかないのではなく、自分の無知に気づいていながら知者を演じることだ。〈独り合点〉や〈早とちり〉などといったこととはまるで違う。〈独りよがり〉に近いが、自信満々なのではない。後ろめたさが伴う。また、学問などに関する演技だけをいうのではない。身近な人に関する知ったかぶりも含まれる。空気が読めていないくせに、読めているふりをする。そういう演技のことも含まれる。「私のいう気取るとか虚栄とかいう意味は、普通のとは少し違います」(下31)というときの変な「意味」とは、知ったかぶりのことだろう。

私は知ったかぶりを批判するわけだが、その是非について論じたいのではない。知ったかぶりをせざるを得ないときはある。真っ赤な嘘や引っ掛けなどと同様、ゲームや戦争では必要悪だ。私が問題にするのは、〈ある知ったかぶりにちゃんとした理由や目的などがあ

るのか」といったことだ。ある知ったかぶりは悪の論理に照らして合理的なのか。思い通りの結果が得られたのか。ただの面白半分でもいい。病気のようなものだというのでもいい。とにかく、私たちにとって理解可能でありさえすればいい。賛成はできなくても、理解さえできたらいいのだ。

『こころ』に登場する人々は、老若男女を問わず、なぜか、知ったかぶりをしまくる。彼らは、立場や価値観の違いなどでくっついたり離れたりしているのではない。建設的な議論をやっているわけではない。他人の言動を自分に都合のいいように曲解してくっついたり離れたりしているらしい。知ったかぶりをする目的などが不明なのだ。弁解めいた話が出てくるが、その話がさらに意味不明ときている。

『こころ』の内部の世界で起きた出来事を意味が通るように語れば、知ったかぶりの喜劇になってしまうことだろう。「笑談（じょうだん）」（下56）になってしまう。陰惨なユーモア小説になる。笑えない喜劇を「恐ろしい悲劇」（上12）に偽装しようとしたのが、『こころ』だろう。ただし、偽装に失敗して意味不明になったもの。お粗末。

5 何者かが語る「私」

「何でも」の文を理解可能なもの書き換えると、次のようになる。

〈当時の私は、神か悪魔のような何者かが語る（「Kと私は何でも話し合える」間柄だ）という物語の「中」の「私」を演じていました〉

これが「何でも」の文の真相だと思われる。

〈何者か〉とは、常識的には「私」だ。この場合、語り手の「私」は真相を隠蔽することになる。隠蔽の可能性を退け、なおかつ個人の心理の枠内で処理しようとする、〈語り手の「私」には意識できないが、もう一人の「私」がいる〉と解釈したくなる。だが、この場合、話がやたらと複雑になる。語られる「私」は多重人格でもかまわないが、語り手の「私」が多重人格では困る。『こころ』がファンタジーなら、何者かは守護天使や悪魔などだ。父母の霊魂かもしれない。この場合も、語り手の「私」は真相を隠蔽することになる。あるいは、真相に気づいていないことになる。気づいていないのなら、『こころ』の作者は真相の解明を読者に委ねていることになる。つまり、『こころ』は謎の物語に分類しなければならない。謎ならば、私たちの答えは一致しなければならない。しかし、一致するのは難しそうだ。結局、足場になりそうなのは隠蔽説しかない。隠蔽されている何者かは「私」か、神秘的存在か、このどちらかだ。神秘的存在を採用しないとすると、語られる「私」はもう一人の「私」を別人と混同していて、この真相を語り手の「私」が隠蔽していることになる。

然し私がどの方面かへ切って出ようと思いつや否や、恐ろしい力が何処からか出てきて、私の心をぐいと握り締めて少しも動けないようにするのです。そうしてその恐ろしい力が私に御前（おまえ）は何をする資格もない男だと抑え付けるように云って聞かせます。すると私はその一言（いちごん）で直（すぐ）ぐたりと萎（しお）れてしまいます。

（下55）

「恐ろしい力」氏が神秘的存在ではないとすれば、彼は間違いなくもう一人の「私」なのだが、語り手の「私」は、いずれでもないような語り方をしている。つまり、語り手の「私」は真相を隠蔽しているのだ。

語り手の「私」が真相を隠蔽する目的は、容易に推測可能だろう。当時の「私」は正体不明の何者かに操られているような気分で生きていたわけだが、語り手の「私」もまだ何者かに操られているように感じていて、その事実を聞き手である「あなた」に知られたくないからだ。

当時の「私」は、誰とも話し合えない男だった。傍証はいくらでも挙げられる。彼は、他人の発言で理解できないことがあっても素直に質問することができず、知ったかぶりをしてきた。知ったかぶりのせいで、「私」は「恐ろしい力」氏の意味不明の「一言（いちごん）」を意味のあるものとして受け取り、「ぐたり」となってしまう。「私」が〈イミフ〜〉と唱えれば、「ぐたり」は回復したことだろう、『ドラゴン・クエスト』の勇者が「ホイミ」を唱えたときのように。

6 軽薄の罪

「Kと私」は〈肝心なことが何も話し合えない仲〉だったようだ。「何でも」という言葉は〈何も〉という言葉の隠蔽するために用いられていると推測される。真相を隠蔽しようとするから、語り手の「私」は意味不明の言葉を並べてしまう。隠蔽に忙しくて、出来事をきちんと語るといふ仕事がおろそかになってしまう。しかも、そのことに気づかないらしい。

「何でも」という言葉は棚上げにして、「話し合える」について考えよう。これは〈語り合える〉という意味のようだ。

〈語り合い〉とは、情報交換のことだ。複数の人間が自分のもっている情報を他人と共有するために交互に語る。「もし我等二人だけが男同志（ママ）で永久に話を交換しているならば、二人はただ直線的に先へ延びて行くに過ぎないだろう」（下25）という意味不明の言葉は、〈二人は語り合えたが、話し合えなかった〉という事実を暴露したものと思われる。〈話し合い〉は問題解決の手段だ。参加者がそれぞれ抱えているのは別のよりよい考えに到達するための作業だ。話し合いの後、参加者の考えは変わっていなければならない。語り合いの場合、考えは変わらない。変わることもあるが、変わらなくてもいい。話し合

いによって考えが変わらなければ、話し合いは失敗したことになる。

「私」は自分の考えを変えたくなかったのだろう。自分がそんなふうだから、他人の考えを変えることも遠慮していたのだろう。そうすると、語り合いをすることしかできないわけだ。

しかし、語り合いさえも演技だったようだ。

Kと私も二人で同じ間にいました。山で生捕（いけど）られた動物が、檻（おり）の中で抱き合いながら、外を睨（にら）めるようなものでしたろう。二人は東京と東京の人を畏（おそ）れました。それでいて六畳の間の中（なか）では、天下を睥睨（へいげい）するような事を云っていたのです。

（下19）

「同じ間」の「間」は「六畳の間」の「間」と同じ。

「生捕（いけど）られた」というが、これが具体的にどのような被害の比喻なのか、わからない。「抱き合う」というのだから、この「動物」はサルかクマのようだが、具体的に表記されない理由は不明。なお、彼らが「東京と東京の人」を畏れる理由は、どこにも語られていない。

「Kと私」の「二人」は〈敵の敵は味方〉といった同盟を結んでいたが、後に敵対せざるを得なくなったとき、話し合いによる平和的変更ができなかった。だから、彼らは、「動物」のように共食いを始めるしかなかったわけだ。

「Kと私」は話し合うことができなかった。だから、「私」はKを「騙（だま）し打（ママ）ち」（下42）にするしかなかった。その結果、Kは自殺した。Kの自殺に拘泥して「私」は自殺を夢見るようになるが、そうした経緯に関して「私」は「貴方に会って話をする」（下56）ことを切望しない。話をしないで、「遺書」とされる手紙を「貴方」に送って自殺しようとしている。面と向かって話をすれば話し合いが始まり、違った展開になるはずだが、その可能性を「私」は検討しない。話し合いに期待していないのだろう。期待しないのは、話し合うための技術が稚拙だからに違いない。語り手の「私」が隠蔽しているのは、彼自身の言語技術の拙劣さだと疑われる。

書いて見（ママ）ると、却ってその方が自分を判然（はっきり）描き出す事が出来たような心持がして嬉しいのです。

（下56）

「私」は、一方的に語ったり書いたりすることを嬉しがる。「私」の言語技術はいびつに発達してしまったようだ。「私」に罪があるとすれば、それは言葉の暴力によって犯したものだだろう。対人関係において一方的に語ったり書いたりするのは、暴力なのだ。その内容

が他人の気持ちを深く思いやるものだったとしても、相手が苦しむことはある。なぜなら、その相手は、あくまで〈「私」の中の「貴方」〉でしかないからだ。ありがた迷惑。余計なお節介。

何者かが「私」の罪を問うとしたら、「私」は相手が納得するまで弁明しなければならない。生き延びたいければ、「私」は議論して勝たなければならぬ。罪を認めるにしても、「懺悔の言葉」（下52）が意味不明なら、審問は終わらない。

「私」が自殺を夢見るのは、質疑応答を回避したいからだろう。つまり、自分の言語技術の拙劣さを認めるよりは、〈自殺を夢見る自由〉という「檻の中」にいることを選ぶわけだ。

私はただ人間の罪というものを深く感じたのです。

（下54）

「人間の罪というもの」とは何だろう。

人間のどうする事もできない持って生まれた軽薄を、はかないものに感じた。

（上36）

この文は、「遺書」において「貴方」と呼ばれている人のものだ。くねくねしたみょうちきりんな代物だが、参考にはなる。

「罪」とは「軽薄」のことかもしれない。仏教でいう十悪のうちの〈妄語・両舌・悪口（あつく）・綺語〉の口四（くし）が「軽薄」と呼ばれているようだ。

しかし、そうだとすると、そんなふうに語り手がきちんと表現しているわけではない。むしろ、語り手の言葉遣いそのものが口四に当てはまりそうだ。語り手の言葉遣いを作者が批判的に表現しているのであれば、〈「罪」＝「軽薄」〉と解釈できるのかもしれないが、実際にはそうではないので、この解釈は宙ぶらりんになる。肯定も否定もできない。

7 「私」は誰

「Kと私」は肝心なこととなると何も話し合えない仲だった。このことは疑いようがない。ところが、当時の「私」はこの事実を否認し、「何でも話し合える中」という物語の登場人物である「私」を演じていた。この「私」は、〈物語の中の「K」〉と〈物語の外のK〉をあえて混同していたわけだ。その種の混同を、語り手の「私」も続けている。語り手の「私」は、彼の聞き手に「私のことを理解してくれる貴方」（下52）と呼びかけている。

〈現在の私は、何者かが語る（貴方は私を理解してくれる）という物語の「中」の「私」

を演じています)

また、語り手の「私」は、聞き手が物語の中の「貴方」を演じるように誘導している。ちなみに、「遺書」では、「あなた」と「貴方」の二つの表記が併用されている。

その後(ご)私はあなたに電報を打ちました。有体(ありてい)に云えば、あの時私は一寸(ちょっと)貴方に会いたかったのです。

(下01)

〈「私」の電報を受け取る「あなた」〉と〈「私」が会いたがっている「貴方」〉は、微妙に、しかし本質的に異なる人物のようだ。属する世界が違うらしい。たとえば、〈「私」にとって都合の悪い現実の中の「あなた」〉と〈「私」にとって都合のいい物語の中の「貴方」〉というふうには。

私の努力も単に貴方に対する約束を果たすためばかりではありません。半ば以上は自分自身の要求に動かされた結果なのです。

然し私は今その要求を果たしました。もう何にもすることはありません。この手紙が貴方の手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう。

(下56)

「約束」とは「私の過去を残らず、あなたに話して上(ママ)げましょう」(上31)というもの。「私の過去」は〈「私」が「過去」に体験したこと〉という意味に解釈する。

「もう何もすることはありません」という言葉は、「貴方」にとってほのかな慰めとなるのかもしれない。だが、「あなた」にとっては最大級の侮辱だろう。「あなた」には「私」の口から話を聞く権利があるはずだからだ。「私」には「すること」が残っている。「あなた」が侮辱を感じないとすれば、「あなた」は〈「私」の中の「貴方」〉を演じているのだろう。

一人の人物が「貴方」と「あなた」に分離するとすれば、この二者に対応する「私」というものも二種考えられることになる。〈「私」にとって都合の悪い現実の中の「私」〉と〈「私」にとって都合のいい物語の中の「私」〉というふうには。

二種の「私」を便宜的に使い分けているのなら、支障はない。たとえば、写真の自分を指して〈これは私だ〉と言うとき、理屈では〈私〉が二人いることになっておかしいわけだが、写真というものを知っている人にとっては、全然おかしくない。ところが、「私」は、この二種を混同しているらしい。この「私」は「矛盾な(ママ)人間」(下01)と、問題な日本語で自己紹介をするが、矛盾があるのではない。「私」は相反する意見や感情などを

同時に抱いているわけではない。矛盾と呼べるような厳密な話は出てこない。「私」はいろんな選択肢を前にして、うろうろしているだけのことだ。しかも、選択肢のそれぞれを十分に吟味するための技術が獲得できていない。知ったかぶりをして「矛盾」などという言葉をもてあそぶから、どうにもならなくなる。表現が実感からどんどん遠ざかってしまう。

「私」の混乱は言葉によって生じている。だが、言葉の限界によって生じているのではない。言葉の限界がどのようなものであるにせよ、「私」はそこまでたどり着いていない。いや、たどり着けない。その手前で隠蔽工作を始めてしまうからだ。

語り手の「私」は「この不可思議な私というもの」（下56）と語る。語り手の「私」にとって語られる「私」が「不可思議な」存在であるだけなら、『こころ』は珍談、奇談、怪談としてそれなりに意味のあるものになっていたはずだ。ところが、実際にはそうではない。語り手がフシギちゃんだからだ。

「抱かれてるのはたしかにおれだけど、抱いているおれは、いったいどこのだれだろう」

（『そこつ長屋』興津要編「古典落語（上）」）

『こころ』は、意味が通じるように語りなおせば、落語になってしまうことだろう。

「私」は物知りらしく振舞っているが、その頭の働きは長屋の熊さん並なのだ。しかも、言語技術は熊さんに劣る。

8 知ったかぶり仲間

「私」は、Kや「あなた」を物語に閉じ込めたがっている。Kや「あなた」は、そんなふうに使われて息苦しくなかったのだろうか。平気だったとしたら、なぜだろう。二人とも〈他人を自分の物語に閉じ込めるのは普通だ〉と思っていたのだろうか。Kも、〈僕と彼は「何でも話し合える中」だ〉という物語を心の中で語っていたのかもしれない。「あなた」も〈自分たちは理解し合っていた〉という物語を語るのだろう。『こころ』が理解可能なように振舞う人は、その振舞いによって〈文豪の心と私の心は未知の領域でつながっている〉という物語を何者かに向かって暗示しているのだろう。ただし、そうした物語を信じているわけではない。信じているかのように振舞いたいだけだ。本気ではない。つまり、「軽薄」なのだ。

〈Kと私は知ったかぶり仲間だったのかもしれませんが〉

語り手の「私」は、こんな簡単な反省をしようとしない。当時の「私」の悪癖を引きずったまま、知ったかぶりを続ける。また、『こころ』の作者は、語り手にこの種の反省をさ

せない。

『こころ』は、知ったかぶりを反省しないで生きるための教科書として使える。〈知ったかぶりを反省しないで、自分の失敗を他人や社会のせいにしたたり、逆に、無駄な後悔を繰り返してはいじいじといじけたり悩んだり罪悪感に溺れたり恥じたり卑下したり自嘲したり自殺を夢見たりしていると、何者かに対して自分を立派な人間に見せかけることができる〉という暗示を、『こころ』の作者はその読者に送っている。『こころ』は隠蔽された知ったかぶりの喜劇であるだけでなく、読者にとって自分の知ったかぶりを正当化するための装置なのだ。知ったかぶりを美化したい人が文学の消費者として一定程度存在する限り、『こころ』は売れる。

「私」が自殺の動機として暗示する「明治の精神」（下55）という意味不明の言葉は、知ったかぶりのことだろう。正確に言うと、〈知ったかぶり〉といった類の芳しくない言葉が「あなた」の頭に浮かばないようにするための呪文だろう。

明治の人々は、西洋文化を取り入れるのに急なあまり、知ったかぶりを強いられたことだろう。また、西洋かぶれに対抗しようとして、日本の文化について知ったかぶりをした愛国者もいたことだろう。そのように想像すると、〈今でも「明治の精神」は生きている〉と言えなくはない。知ったかぶりをしないではいられないような風潮は、現在も続いているからだ。だからこそ、いまだに『こころ』が名作のように思えるのだろう。名作であってくれなくては困る人たちがいるのだろう。

今から思うと、その頃私の周囲にいた人間はみな妙でした。女に関して立ち入った話などをするものは一人もありませんでした。

（下29）

「その頃」つまり明治中期の人間には、話題が何であれ、「立ち入った話」をする技術が不足していたのかもしれない。その不足が「私の周囲にいた人間」に限られるのではなく、中流出身で高学歴の男たち、つまり社会の中核で働く人々に共通する傾向だったとしたら、それを「明治の精神」と呼んでも不当ではなからう。

9 ギブスとハミ

知ったかぶりに習熟するための装置を〈知ったかぶり養成ギブス〉と名づけよう。このギブスは、思考の自由を奪うために用いられる。〈マインド・コントロール〉という言葉を使うと通りがいいのかもしれないが、さほど手が込んだものではない。また、完全に操られてしまうわけでもない。固定する形が決まっているのでもない。教養、思想、信条、趣味などとは一切無関係だ。

このギブスは、心を「信念と迷いの途中」（下15）で固定する。「迷い」が〈信と不信

の往復)のことだとすれば、この言葉は矛盾の表現ではなく意味不明なのだが、意味不明であることはむしろギブスの要件のようだ。意味不明だからこそ知ったかぶりが発揮できる。この「途中」とは、真偽、賢愚、善悪、正邪その他の中間地点つまり〈普通〉を指す言葉ではなく、判断の「途中」を指すものと思われる。判断を保留するのではない。自分の心の動きについて知ったかぶりをする。思考を継続するのでもなく、放棄するのでもなく、その「途中」で無理やり固定するのだ。すると、不安が普通になる。不満が不満として自覚できなくなる。頭の芯がよどんでくる。「神経衰弱に罹っている位」(下22)になる。信じるのでもなく、疑うのでもなく、何もしないのでもなく、いらいらしている。眠ればいいのに、眠れない。やがて、不機嫌が性格になる。喜怒哀楽を怒で表す。怒りが無効なときは「笑談」を仕組む。自分のギャグに自分でウケてみせる。楽しくもないのに笑う。笑いながら怒る人になる。普段は能面。

その眼、その口、何処にも厭世(えんせい)的の影は射していなかった。
(上31)

「信念と迷いの途中」という言葉は何かを表現したものではなく、表現すべき何かの一部なのだ。つまり、こういう妙な言葉遣いをするから、この言葉によって表現しようとした何かを始末することができなくなる。面倒な何かは継続し、悪化するばかりだ。また、これは、そんな情けない状態を表現しようとして失敗した言葉でもあるのだろう。

知ったかぶり養成ギブスを装着するのは、精神的な自殺行為だ。また、その着用を他人に強いるのは暴力だ。青少年に『こころ』を読ませるのは、一種の虐待だ。《『こころ』を読ませるな》などと叫ぶつもりはない。どうせ、聞いてはくれない。自分で自分を守りたくない。

Kは、「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」(下30)という意味不明の言葉によって「私」を縛ろうとした。「私」はこの言葉をKに「投げ返した」(下41)が、そのせいでKは自殺を夢見るようになったらしい。後に、「私」もこの言葉のせいで自殺を夢見るようになるらしい。「Kと私」にとって、この言葉は呪文のような効力を発揮したわけだ。知ったかぶりだから、意味不明の言葉に縛られてしまった。この言葉の意味について「話し合える中」だったのなら、「Kと私」の自殺は回避できたかもしれない。

「明治の精神に殉死する積りだ」(下56)という意味不明の言葉は、〈明治の流行である知ったかぶりが高じて神経衰弱になって自殺してしまうかもしれない〉という真相を隠蔽し、美化するものだろう。こうした真相を「私」が誰にでも意味が通じるような言葉で「私」の状態を「書いて見ると」つまり〈書いて〉から書いたものを他人の仕事として「見ると」自殺は回避できるのかもしれない。ところが、「私」にはそういうことができない。書いただけで嬉しがってしまう。「明治の精神」とは、「私」の物語を「医者にも誰にも」(下54)自分自身にも明示できず、意味不明の言葉で何者かに暗示して嬉しがるような精神

状態のことだろう。

私が批判しようとしているのは、要するに、このギプスなのだ。

批判すべきギプスの典型として、私は『こころ』を選ぶ。そのわけは、私には意味不明なのに世評では明快ということになっていて、しかもその差が無視できないほど大きく、そして日本でよく読まれているものという、まず『こころ』を思い出すからだ。

意味が意識のハミだとしても、人間の意識が怯えた暴れ馬であるのなら、ハミは必要かもしれない。できることなら、私はハミを外したい。だが、代わりににギプスをはめられるのなら、しばしハミに耐えよう。

目次

はじめに (伝説の終わりに)

～知ったかぶり養成ギプス『こころ』～

1 『こころ』は意味不明 2 文豪伝説を疑う 3 神のように語る「私」 4 知ったかぶりについて 5 何者かが語る「私」 6 軽薄の罪 7 「私」は誰 8 知ったかぶり仲間 9 ギプスとハミ

(略記その他について)

第一章 ロマンズの塊

1 「笑談」(意味ありげな言葉)

〈1 『こころ』は意味不明 2 名文にして悪文 3 ありがちな誤読の例 4 意味のブランク 5 私は読者を選ぼう 6 自分語の世界〉

2 「黒い光」(文の意味が不明)

〈1 黒い炎 2 幻覚か比喩か 3 ブラック・ライト 4 猛烈な反語 5 黒い世界〉

3 「露の秋」(段落の趣旨が不明)

〈1 一個人一言語 2 答えのない謎 3 独り芝居 4 下手な作文 5 無用な描写 6 漱石枕流〉

4 「花やかなロマンスの存在」(物語が完結しない)

5 「背景」(物語の前提が不明)

第二章 無意味な意味

1 「罪悪という意味」

(「意味」の意味)

2 「曖昧な返事」

(多義)

3 「いざという間際という意味」

(隠蔽された意味)

4 「まるで無意味なのです」

(「無意味」の意味)

5 「漠然とした言葉」

(意味ありげな言葉)

6 「空虚な言葉」

(嘘)

7 「意味が能く解るか」

(語りえない意味)

第三章 イメージの精神

第四章 軽薄なPの記憶

第五章 ぐるぐる回るSの弁解

第六章 もっと早く死ぬべきだったKの尊い過去

第七章 不可思議な私の秘密

(略記その他について)

一、およそ百年前の日本に生きていた個人としての漱石夏目金之助をNと記し、『こころ』の作者と区別する。〈作者〉とは作品の発生に関与すると考えられる人格つまり送信者だ。たとえば、『ブレードランナー』(リドリー・スコット監督)には三つのバージョンがあるので、作者も三人考えられる。作者は、やはり仮定された受信者である〈読者〉とセットになっている。〈読者〉も、生身のあなたや私とは似て非なる存在だ。一般に、私たちは〈自分が想定する作者〉が想定する読者を演じることによって読書を継続する。なお、〈作品〉とは、〈作者から読者へ送られた情報〉のことだ。料理でも、料理人の意図などについて考えるときには作品と呼べる。風景や事故を神や悪魔の作品と見なすこともできる。タモリは赤塚不二夫の作品だ。

二、『こころ』の「上 先生と私」の章を「上」と略記する。同じく「中 両親と私」を「中」と、「下 先生と遺書」を「下」と略記する。また、各章の回の番号を英数字で示す。例えば、『こころ』の冒頭は〈上01〉となる。

三、『こころ』の冒頭で「先生」と呼ばれている人物を〈S〉と書き、Sを「先生」と呼んでいる人物を〈P〉と書く。Sは、senseiの「頭文字(かしらもんじ)」(上01)だ。

Pは、personもしくはpartnerもしくはpetから。

四、Pが語り手である「上」と「中」を合わせて、〈P文書〉と記す。

五、P文書の語り手を〈語り手P〉と記し、P文書の登場人物である〈語られるP〉と区別する。

六、P文書の受信者を〈聞き手Q〉とする。アルファベット順でPの次だからだが、questionerの頭文字と考えてもいい。Qは作品に登場しない。登場しているのかもしれないが、私たちには特定できない。いずれにせよ、Pは誰かに語りかけるように書いているので、Qを想定せざるをえない。P文書は、〈PとQの架空対談〉として構成されている。

七、「遺書」と記すとき、それは「下」に限定しない。「中」にも「遺書」からの引用が出てくるからだ。「遺書」の全文がどのようなものか、不明。「遺書」はP文書において引用されたものだから、広義のP文書は『こころ』の本文と一致する。だが、単に〈P文書〉と書くとき、四に述べた意味で用いる。

八、「遺書」の語り手を〈語り手S〉と記し、「遺書」の登場人物である〈語られるS〉と区別する。なお、「遺書」における〈語り手Sによって語られるS〉と、P文書における〈語り手Pによって語られるS〉は異なる。また、P文書における〈語り手Pによって語られるP〉と「遺書」における〈語り手Sによって語られるP〉も異なる。作者にとっては微妙な相違なのかもしれないが、私たちにとっては決定的な相違だ。

九、語り手Sのいう「外の人」(下56)や「他」(下56)などを合わせ、〈R〉と略記する。Qの次だからだが、readerの略と考えてもいい。「遺書」は〈SとPの架空対談〉として構成されており、この架空対談の読者がRだ。『こころ』の内部の世界において、RはQと同じなのかもしれない。同じだとしても、『こころ』の読者ではない。

十、「遺書」はSの「自叙伝の一節」(下56)とされている。語り手Sは「自叙伝」の編者だ。勿論、完全版「自叙伝」は実在しない。「自叙伝」は、死ぬ寸前まで継続するSの意識と区別できない。「自叙伝」の語り手はSだが、このSは「遺書」の語り手Sとは異なる。完全版「自叙伝」が実在しないのだから、その語り手であるSも実在しない。そして、この実在しないSは、「自叙伝」の主人公Sと区別できない。不完全な「自叙伝」の曖昧な語り手であるSは、その曖昧な聞き手Dとセットになっている。また、「自叙伝」において語られるSは、この奇怪なDと腐れ縁を結んでいる。DはSのDoppelgänger(分身)かもしれない。『こころ』の内部の世界に実在したのは、「遺書」において語られるSとDを混合したような人物だったのである。Dは「一種の魔物」(下37)であり、devil(悪魔)あるいはdemon(悪霊)の略。Dはdetective(探偵)で、detractor(中傷者)で、debater(論敵)で、dominator(支配者)だった。「自叙伝」というドラマのdirector(演出家)でもある。Dは、daddy(お父さん)の亡霊かもしれない。要するに、正体不明のdareka-sanだ。なお、DはPの周辺にも出没するらしい。Dの正体が明らかになったとき、『こころ』

は作品として解体し、同時に作者が消滅する。そのはずだ。

第一章 ロマンズの塊

1 「笑談」

(意味ありげな言葉)

1 『こころ』は意味不明

私は『こころ』は意味不明だ』と主張するのだが、意味不明なのは『こころ』だけではない。夏目漱石（以下、Nと略記）の作品には、どれにも意味不明の言葉が大量に含まれている。小説や随筆、論文、講演記録といった作品のほか、書簡や日記などでも同様のことが観察される。俳句や漢詩などはさほどでもないが、そもそも詩歌は舌足らずなものだろう。要するに、Nの言葉は歌の切れ端みたいなのだ。Nは散文で歌っている。うっすらと何かを感じることはできても、はっきりと何かを理解したり想像したりすることはできない。

私の批判の対象である文豪N伝説の主人公は、青年を導く人生の教師とかモラリストなどではない。東洋的個人主義者でもない。人間の根源的な不安とやらを凝視した苦悩の達人でもなく、限りなく優しい弱者の味方でもない。ポストモダンを予見した超天才でもない。ただの名文家だ。明晰な文章の書き手とされる文筆家だ。歯に衣着せぬ物言いで聴衆の心を動かしたとされる名演説家だ。

意味不明のNの言葉に対して、私たちの採りうる態度は、次の三つしかない。

- ①文豪N伝説を信じ、自分勝手な解釈で満足する。〈俺様は読解の天才だ〉とうぬぼれる。
- ②文豪N伝説を疑い、あえて重箱の隅をつつく。自分の知識や理性をも疑う。
- ③信じるのでもなく、疑うのでもなく、びくびく、ひやひや、にやにやして暮らす。

私の想像では、ほとんどの人が③のごまかし路線を選んでいるはずだ。何を隠そう、かつての私がそうだった。ところが、私の場合、ごまかし路線は長続きしなかった。若いころは、〈自分がものを知らないから、Nの言葉を理解することができないのだろう〉と思っていた。ところが、そうした安直な卑下では片が付かないことに気づく。知識が増えれば増えるほど、Nの言葉が奇妙なものに思えてくるからだ。

普通の中高校生が何の苦もなく『こころ』を読み終え、さらさらと感想文を書き、文学の専門家でもない教師がそれをざっと眺めて採点し、生徒もその評価に納得する。こんなことは、私にはお芝居としか思えない。お芝居ではないとしたら、私は〈自分の日本語の

能力は自分で思っているよりもずっと劣っている〉と考えなければならないわけだが、そうした考えを受け入れることは、本人である私にはできない。だから、②を選ぶ。

補足しよう。

自分の握力の程度を自分で知ることはできる。握力計という器械があるからだ。しかし、母語の能力を自分で知ることはできない。握力計に相当するものがないからだ。日本語検定みたいなものを受けてみると点数が出てくるのだろうが、その検定の主催者が文豪N伝説の信者である場合、試験問題そのものが怪しいのだから、受けても無駄だろう。そもそも、その種の検定が有効だとすれば、私の考えでは、文豪N伝説はすでに過去のものになっていなければならない。

もしかしたら、私の日本語の能力は標準に達していないのかもしれない。そして、その事実を、私は今、この文章によって暴露しているのかもしれない。だが、そうだとすると、そのことを誰かが私に理解できるように丁寧に説明してくれない限り、自分ではどうにもならない。そんな親切な人が現れてくれたら、私の人生は大きく変わるかもしれない。だから、私の貧弱な感じ方、考え方を開陳する価値はありそうだ。

私は、〈Nの言葉は意味不明だ〉という個人的印象から出発するわけだが、私が本当に批判したいのは、Nの言葉そのものというよりは、〈Nの言葉は明瞭だ〉と思われている現状だ。人々が②を選ばないのは勝手だ。しかし、②が選択肢の一つとして認められてこなかったのは、非常におかしい。①を選ぶ人でも②を認めなければならない。

とりあえず、〈Nの言葉に対する私の印象は適当だ〉ということにしよう。では、なぜ、〈Nの言葉は意味不明だ〉と主張する人がいないのだろう。いるのかもしれないが、なぜ目立たないのだろう。意味不明なのは、Nの言葉だけではないからだろう。

巷には、意味ありげな表現が大手を振ってまかり通っている。政治家の言葉を筆頭にして、「頗（すこぶ）る不得要領」（上07）で「空（から）っぽな理窟」（上16）や「空虚な言葉」（下22）や「小理窟」（下31）が大量に出回っている。〈Nの言葉は意味不明だ〉ということを知ってしまったら、その種の意味不明の言葉を総点検しなければならなくなりそうだ。誰だって、そんな大仕事には関わりたくないことだろう。だから、〈Nの言葉は意味不明だ〉と思っても、その思いをそそくさと打ち消すのだろう。

Nの言葉のおかしさは、他のおかしな人たちの言葉に紛れて目立たない。日本で育った人は、少しぐらい〈おかしい〉と思っても目くじらを立てるのが大人気ないように思えて口をつぐんでしまう。けれども、大目に見てやるべき相手とそうではない相手がある。文豪Nは幼児でもなければ外国人でもない。大目に見てやるべき相手ではないのだ。そもそも、名の通った作家の言葉遣いを大目に見てやれる人とは何様だろう。この何様は、屈辱と驕慢の濁流でアップアップしているのに違いない。

2 名文にして悪文

人は、Nの小説を斜めに読んで、〈解説〉という伝説の切れ端を覚え、そして、わかったことにしてしまうらしい。

〈Nの小説は一定の速度を保って読むと面白いが、ちょっと引っかけると難しく感じられる〉といったようなことを、誰かが得意げに書いていた。私は笑った。だが、すぐに不愉快になった。〈一定の速度〉というのは、実はスピード違反なのではないか。〈門前の小僧、習わぬ経を読む〉という。この小僧は経文の意味を知っているのか。その真意を悟ったのか。

速読とか斜め読みとか、そういう読み方を批判しているのではない。ざっと目を通すということは、私でもやる。けれども、そんな読み方で作品を理解することができるとは、思わない。自分にとって必要な情報を探しているとき、発信者のことなど何とも思っていないとき、そんなときにやるだけだ。速読とか斜め読みなどをしたときに得た印象は、精読するとき、しばしば訂正を余儀なくされるものだ。ところが、あくまで第一印象にこだわる人たちがいる。そうした頑なな態度を私は批判している。

Nの言葉が意味不明だということは、精読しなくてもわかる。がんばらなくていい。むしろ、がんばらないほうがいいのかも说不定。普通に落ち着いて、素直な気持ちで読んでみよう。すると、すぐに戸惑うはずだ。何が書いてあるのか、わからない。内容がつかめない。文字通りに受け取ることができない。

要するに、Nの言葉は悪文なのだ。単に稚拙なのではなく、妙な魂胆があって気取りすぎた結果、意味不明になったものだろう。古典などに頼って、必要もないのに珍しい語句を並べる。冗談めかして屁理屈とも妄想ともつかない妙な話をする。自分ではよく理解できていないらしい語句や論理にすぎるからか、すぐに袋小路に入る。どうにもならなくなると幼稚化し、基本語を多義的に用いる。そして、自分で自分の考えていることがいよいよわからなくなってしまうらしい。きりきり舞いをして、やたらと突っ張る。突っ張ってどうしたいのか、自分でもわからないらしい。過剰防衛の結果、妙に攻撃的になっているようだ。距離を置いて眺めるとかなり滑稽な光景なのだが、気の弱い人だと参ってしまうらしい。雑多にある文豪N伝説のどれかが駄目押しをする。

国語学者たちが集まってこしらえた『第三版 悪文』（岩淵悦太郎編著）には、あの有名な「智に働けば角が立つ」（N『草枕』一）を含む文章が「名文」として紹介されている。驚くべきことだ。あれは美文なのかもしれないし、〈有名な文〉という意味では名文であることに間違いはないのだが、意味不明の悪文なのだ。

「智に働けば」が意味不明だということぐらい、誰にでもわからなければならない。〈智に働く〉という言葉が日本語にないからだ。〈地に働く〉のは農民で、〈胃に働く〉のは胃薬かもしれない。では、〈智に働く〉のは何だろう。ホワイトカラーか。精神安定剤か。こうした問題に答えられない人は、この文を理解していることにならない。

だが、〈理解〉という言葉の意味が共有されていなければ、私の主張は理解されないことだろう。私のいう〈理解〉は、「私のことを理解してくれる貴方」というときの「理解」と

は意味が違う。

「広辞苑」は〈理解〉について次のように説明している。

①物事の道理をさとり知ること。意味をのみこむこと。物事がわかること。了解。「文意を一する」

②人の気持ちや立場がよくわかること。「一のある先生」「関係者の一を求める」

③〔哲〕(→) 了解②に同じ。

③は無視。

〈普通に読んで理解できる〉というのは〈理解①〉の「意味をのみこむこと」に類する。ただし、「のみこむ」は比喻だろうから、辞書の説明としては不適切。要するに、〈理解〉とは〈意味〉が理詰めで「わかること」だ。しかし、「意味」や「わかること」がまたわからない。

言語活動では、②は①を前提にしているはずだ。Nという人の気持ちや立場に関して理解②をすることは、彼自身の言葉を聞いたり読んだりしていなくても可能なのかもしれないが、『草枕』の作者の気持ちや立場について理解②をするためには、本文の理解①が済んでいなければならない。このことは疑いようがない。ところが、『草枕』を理解したと主張する人は、〈①を飛び越えて②に到達できる〉と思っているらしい。ある文を構成する語句が他の文において用いられるときの意味合いその他をぼんやりと夢のように思い描き、そうしたものと口調などをまぜこぜにして、ほろりと酔ったような気分になることを〈理解〉と称しているらしい。私は、そういう気分を指して〈理解〉とは呼ばない。〈理解②ができた〉という自己暗示にかかることと掛け値なしの理解①は違う。

〈わからなくてもできる〉ということはある。たとえば、私たちは〈生きる〉ということがわかっていなくても生きていられる。そもそも、〈生きる〉という言葉を知る前から生きている。できるからといってわかっていることにはならない。たとえば、選手はコーチほどものがわかっていないが、コーチよりうまくやれる。

数学でも、公式を覚えていさえすれば問題は解ける。長方形の面積を求めるためには、〈縦の長さ×横の長さ〉という公式を覚えていて使えさえすれば十分だ。しかし、〈公式を使いこなせる〉というだけでは、公式の意味を理解していることにならない。なぜ、一次元の〈長さ〉をいじると二次元の〈広さ〉が出てきてしまうのか。そのことが理解できなければならない。この公式の正しさを証明するためには、長方形を一辺が1の正方形で分割してみせる。〈正方形の個数〉と〈公式によって求めた数〉は等しい。よって証明終わり。しかし、ここでわかったつもりになるようでは駄目だ。この場合、この正方形の面積を1と考えたが、なぜ、1なのだろう。この面積を〈 1×1 〉で求めたのだとしたら、証明すべき結論を前提にしているのだから無意味だろう。実は、〈一辺が1の正方形の面積は1〉というルールは、突然現れる。基本となる量は突然現れるのだ。たとえば、そこらに落ちて

いる棒の長さを〈1〉として道のりを測る。広さも同様で、〈ある空間を同じ大きさの正方形で敷き詰める〉という作業をするとき、そこらにある正方形の広さを〈1〉とするわけだ。1の代わりに2や3などを使ってもかまわないのだが、1以外の数にしても計算がいたずらに面倒になるだけだから、1が適当だ。なお、単位となるのは正方形でなくてもいい。日本では部屋の広さをそこに敷き詰められる畳の数で表すが、畳はいうまでもなく正方形ではない。要するに、〈縦の長さ〉とは〈整列している合同の長方形の縦の個数〉のことであり、最初から二次元の世界で考えていたわけだ。一次元の世界が二次元の世界に変化したのではない。ここまで考えてきて、やっと公式の意味が理解できたことになる。なお、この簡単な公式を微積分で証明しようとしているのを見たことがあるが、私には理解できなかった。ちなみに、三次元の場合でも、単位となる直方体は突然現れる。大雑把な場合、たとえばりんご箱の容積は、そこに詰めることのできるりんごの個数で表す。〈四次元〉という概念が難解なのは、単位となるべき何かを日常生活で観察することができないからだ。

〈1〉という数は突然現れる。〈2〉が突然現れることはない。二個の物体が突然現れたら〈一対〉だろう。〈0〉が突然現れることもない。〈ゼロから始める〉と言う人がいるが、数はゼロから始まるのではない。〈無〉は〈有〉の否定として現れる。〈有〉がなければ〈無〉はない。無から有が生じるとしたら奇跡だ。

〈突然現れる〉という言葉に抵抗を感じる人がいるかもしれない。数に限らず、基本的な言葉は突然現れるものだ。たとえば、〈ネコ〉という言葉は、ほとんどの日本人にとって突然現れたものだろう。いわゆる動物のネコと〈ネコ〉という言葉の関係は頭の中で突然結ばれる。〈ネコ〉の語源や何かを知った後に関係が結ばれるわけではない。〈ネコ〉という言葉から連想する事柄は人によって異なるわけだが、連想した事柄を、私は〈意味〉とは呼ばない。

ネコの価値は人によって異なる。だが、私はそういう話をしていてのではない。言葉の話をしているところだ。言葉の価値について話しているのでもない。〈ネコ〉という言葉と〈ニャンコ〉という言葉の価値は違う。好き嫌いがある。しかし、〈ネコ〉と〈ニャンコ〉の意味は同じだ。

〈ウミネコ〉を〈ウミ+ネコ〉と分割する必要はない。ウミネコは〈ウミネコ〉だ。〈自動車〉が〈自動+車〉ではない人にとって、馬車は〈馬が引く自動車のようなもの〉として理解される。多くの日本人にとって、〈テレビ〉は〈テレ+ビ〉ではない。〈パソコン〉は〈パソ+コン〉ではない。〈ケータイ〉は〈携帯電話〉の略ではない。電話として使わなくても〈ケータイ〉だ。

俗説では、〈精神や意識や心などと呼ばれる何かがどうにかして言葉になる〉とされる。あるいは、〈靈魂が肉体に宿るように、意味のない音や形などに意味が宿って言葉になる〉とされる。こうした俗説を信じている人は、〈言い方が悪いだけで、考え方は正しい〉などと威張るのだろう。しかし、言い方が悪ければ、考えは私たちの前にまだ出てきていない

のであり、したがって、考え方の正誤を判断することはできない。

意味は不可避なものとして個人の前にある。自分にとってそれ以上分割することのできない言葉にたどり着くとき、同語を反復するしかないようなとき、つまり、意味がそのまま言葉であるような言葉に到達したとき、理解できたことになる。〈ネコ〉について、辞書には〈哺乳類食肉目ネコ科の愛玩動物〉などといった記述があるが、そんな記述は不要だ。ネコの姿を思い浮かべることができたら十分なのだ。イヌに似ているが、かなり違う。その程度で私たちは満足している。もっと貧弱な知識しかないこともある。漫画やぬいぐるみ、置物などでしかネコを知らない人もいる。だが、生きているネコを初めて見たとき、〈これはネコだ〉と思う。ネコに触れたことのない人でも、〈ネコ〉の意味を理解している。勿論、理解したつもりでも、後から疑わしくなることはある。〈ネコ〉を〈ネ+コ〉に分割する必要が出てくることもある。理解が誤解であることは、大いにありうる。だが、誤解もまた理解の一種だ。

遅ればせながら、〈口調〉という言葉について考えておこう。

笹岡は自分の言いたいことだけを話す。

これは詐欺師がよく使う手である。

スピード感のある口調で話の切れ目をなくし、相手の疑問や質問を消し去るのだ。そして自分が伝えたい情報のみをインプットさせる。

(多田文明『なぜ、詐欺師の話に耳を傾けてしまうか?』)

『草枕』の語り手はC調なのではないか。彼には、彼の想定する聞き手の「疑問や質問を消し去る」という意図があるのではないか。彼の想定する聞き手が彼の分身だとすれば、いわゆる自己欺瞞ということをやっているのだろう。

このような疑問を抱かない人の読解力は、かなり怪しいものだ。そんな人は、いつ詐欺の被害に遭ってもおかしくない。おそらく、少なくない人が疑問を抱くのだろうが、その疑問を押し殺すのだろう。押し殺すのが快感なのかもしれない。『草枕』の語り手は、聞き手にその種の快感を味あわせようと企んでいるのかもしれない。この快感を覚えた人は、詐欺と知っていてわざわざ引っかかるタイプだろう。優しい嘘に弱い。マゾかもしれない。〈日本文化の精髓はマゾヒズムだ〉みたいなことが『家畜人ヤプー』(沼正三)に書いてあった。

私は詐欺に遭ったことがある。そのとき、内心では〈怪しげな話だ〉と思って相手の話を聞いていた。ところが、いや、だからこそ、〈疑問を口にするのは野暮だ〉という気持ちが働いた。知ったかぶりをしてしまった。水清ければ魚住まず。魚心あれば水心。そんな気になっていた。詐欺師は、口調によって人をそんなうかうかとした気にさせてしまう。騙されたと気づいたとき、自分が進んで共犯者になろうとしていたことにも気づいた。そのときまではぼんやりとしていて、〈人助けもできるし、自分も儲かる〉などと、のんきな

ことを考えていた。

完璧な嘘には、誰だって騙される。これに対処する方法は、まずない。ある時代のある社会の文化は、その社会に育った人間にとって、ほぼ完璧な嘘だろう。簡単には拒否できない。一方、完璧ではないからこそ、わざわざ騙されてやる嘘もある。これに対処する方法なら、ある。怪しげな話は眉に唾をつけて聞くことだ。〈協調性のない人だ〉とか〈冷たい人だ〉とか〈頭の硬い人だ〉などと思われるのを恥じないで、日ごろから、報道はもとより、小説やドラマでも、怪しげな話を面白がらないようにする。Nの言葉のような意味不明のものに親しまない。いわゆる都市伝説なども、〈辻褃が合っているか〉と疑いつつ聞く。愚痴や中傷を聞かされても、慌てて同意したり反発したりせず、まず話としての出来具合を調べる。同意はもとより反発も危険なのだ。おかしい話を持ち込む人は、こちらが反発した場合につくための嘘もちゃんと用意している。

意味不明の発言に反論する人は、半ば騙されている。たとえば、〈霊魂は実在する〉という主張に対して〈霊魂は実在しない〉と反対する人がいる。だが、〈霊魂〉という言葉の意味は〈ネコ〉や〈正方形〉などのそれと違って自明ではないのだから、反対するのは無意味なのだ。知ったかぶりは〈霊魂が実在する証拠があるのか〉などと愚かな質問をする。その時点で、質問者は神秘主義者の仲間入りを宣言してしまったことになる。つまり、打倒すべき敵の弟子になっている。混乱してしまった。しかも、そのことに気づかないぐらい混乱している。そんな人を騙すのは、赤子の手をひねるようなものだろう。

「智」という言葉の意味は、〈霊魂〉の場合と同様、自明ではない。また、〈智に働く〉という日本語もない。したがって、「智」の文は意味不明なのだ。ただし、普通に読んで意味がなくても、ことわざのように特殊な意味があるのかもしれない。たとえば、〈木で鼻をくくる〉という言葉は、普通に読んだら意味不明だが、ことわざとしては意味がある。その意味とされるものは、複数の辞書でほぼ同じだ。したがって、支障はない。ところが、「智」の文の場合、辞書によってその意味とされるものが微妙に違っている。辞書の説明自体が意味不明のこともある。

①「理知的な判断だけで動こうとすると他人と摩擦を起こすことになる」（「成語林」「智に働けば角が立つ」から）

②「理知だけで割り切っていると他人と衝突する」（「大辞泉」「智に働けば角が立つ情に棹させば流される」から）

③「理知的に動けば他人との間に角が立って穏やかに暮らせなくなる」（「故事・ことわざ慣用句辞典」「智に働けば角が立つ情に棹させば流される意地を通せば窮屈だ」から）

この三つの説明が異なることは自明だろう。しかも、①と②は意味不明だ。

①の場合、〈「動こうとすると」→「摩擦を起こすことになる」〉というが、動かなくても摩擦は生じている。「理知的な判断」と「摩擦」に直接の関係はない。自分と外部の摩擦は、

自分が動いても動かなくても起きるのだから、「動こう」という気持ちを話題にする必要はない。

②の場合、「割り切っている」という言葉が意味不明。割り切ることと衝突の関係が不明。日本語になっていない。

①と②が同じ意味だとすれば、「動こうとする」と「割り切っている」は日本語では同じ意味のはずだが、さて、同じだろうか。私は違うと思う。

③は妥当なようだが、実はこの三つの説明に共通する難点がある。それは〈意味が重複している〉ということだ。

理屈っぽい言動によって他人との間が穏やかでなくなる。

(「大辞泉」「角が立つ」から)

「角が立つ」という言葉自体に「理屈っぽい」という意味が含まれている。しがたって、「智に働けば」という部分は不要なはずなのだ。この部分が「理屈っぽい言動によって」と同じ意味だとすると、《『草枕』の語り手は無駄な言葉を用いた》と考えなければならない。その場合、あえて無駄な言葉を用いた理由が説明できなければならない。無駄ではないとすると、「智」は「理屈っぽい言動」とは違うもののはずだから、その意味を改めて考えなければならない。

なお、先の三説の「角が立つ」の部分の説明も微妙に違っている。「他人と摩擦を起こすことになる」と「他人と衝突する」と「他人との間に角が立って穏やかに暮らせなくなる」は同じだろうか。違うね。

次のような説を採用すれば、重複は生じない。

ことが荒立つ。「物も言い様で一」

(「広辞苑」「角が立つ」から)

次のような説でもいい。

人間関係が穏やかでなくなる。「直接文句を言っては一」

(「明鏡国語辞典」「角が立つ」から)

〈角が立つ〉という言葉の意味も辞書によって異なるわけだから、いよいよもって「智」の文の意味はわからなくなる。

もっと困ったことがある。「智」の文の理解のために参考にした三つの辞書の見出し語が全部違っているのだ。①は一個の文だけを対象にしているからいいが、②と③は怪しい。③はよさそうだが、実はこれらの文を含む段落は四つの文で構成されている。四番目の文

は「とにかくに人の世はすみにくい」というものだ。②や③は、なぜ、四つの文を見出し語にしなかったのだろう。四つが多すぎるのなら、①のようにすべきだ。これらの辞書は二個や三個の文を一塊のものと考えているのだから、本文を誤読していることになる。

なお、意味の相違は、第二文である「情」の文でさらに大きくなる。また、第三文で〈意〉ではなく「意地」という熟語が用いられているのも怪しい。「智」や「情」も〈智〇〉や〈情〇〉といった熟語の略と考えられる。

とにかく、『草枕』の有名なこの段落に関して、専門家の間でもその意味は共有されていないようだ。このことは、ほぼ間違いない。ところが、彼らはこの事実を知らないか、あるいは隠蔽している。

意味不明の「智」の文に意味があるものと見なし、その意味から『草枕』の意味を推定し、さらにはN論を展開するような作文は、全部食わせ物なのだ。これらの怪しげなN論は、堂々巡りの一部を切り取ったものだろう。実際には、論者にとって都合のいいN像がまずあり、そのN像に適合するように『草枕』を誤読し、その誤読を正当化するように「智」の文の意味を捏造しているのだろう。この捏造された意味から出発して作品論そして作家論を捏造するわけだ。

ところで、あらゆる辞書の意味が同じだったとしても、〈あらゆる辞書が同じ間違いをしている〉という可能性は残る。たとえば、『吾輩は猫である』の「吾輩」について、複数の辞書が〈尊大な表現〉と説明しているようだ。しかし、この「吾輩」に尊大といった含意はない。逆に、謙遜や卑下の表現だ。ただし、慇懃無礼のようにも、つまり「謙遜（けんそん）過ぎて却って世間を冷評する様にも」（上11）思えなくはない。だが、そうした意図があるとしても、それが「世間」に通じているのか、不明。

『吾輩は猫である』以前の文章で〈わがはい〉が尊大な表現として用いられていたという事実を、私は知らない。『吾輩は猫である』以降、〈わがはい〉は尊大な表現として用いられているようだが、そうってしまったのは、どうやらこの作品が誤読された結果らしい。そうだとしたら、現在の〈わがはい〉という言葉は、誤読から生まれた意味で用いられているわけだ。だから、その間違った意味で『吾輩は猫である』を読めば、かなり注意しても誤読してしまう。誤読に誤読を重ねたら、どんどん本文から遊離してしまう。

一文としては意味不明でも、その前後を読めば意味が推定できることもある。「智」の文は、そうしたものかもしれない。だが、この文に関する俗説は、そうした面倒な作業の後に生まれたものではなかろう。あくまで〈「智」の一文だけで明快な意味がある〉とされているようだ。

もっと素朴な話をしよう。「智」の文は、古文でも方言でも隠語でもなぞなぞでもないはずだ。それなのに、なぜ、辞書で説明をする必要があるのだろう。〈「智」の文には説明が必要だ〉という判断そのものが〈「智」の文は意味不明だ〉という印象を前提にしているのではないのか。

結論。日本人は、「智」の文の意味を共有しているのではなく、〈文豪Nの名作『草枕』

に含まれた言葉には明快な意味がある」という伝説を共有しているだけなのだ。

『こころ』の場合も同様で、日本人が共有しているのは『こころ』の意味ではない。〈『こころ』には意味がある〉という伝説だけだ。

誤解のないように、急いで付け加えなければならない。私は、〈意味不明の表現は無価値だ〉などと野暮な主張をしているのではない。意味がなくても価値のあることはある。

「チッチキチー。意味はないけど、楽しい言葉」と、大木こだまさんが語るのを私は聞いた。

意味ありげなだけで確かな意味がなさそうな言葉を私は批判するのだ。

3 ありがちな誤読の例

私は〈Nの言葉は意味不明だ〉と主張するわけだが、そんな主張は無駄なのかもしれない。

漱石の作品は、かなりヘンテコで面白い。

(新潮文庫『文豪ナビ夏目漱石』カバー)

「面白い」かどうかはさておき、「かなりヘンテコ」であることは、ある種の人々の間では常識なのかもしれない。ただし、「かなりヘンテコ」がNの卓越した個性その他を暗示する反語だとしたら、私の印象とはかなり違う。「かなりヘンテコ」なのは、その言葉遣いなのだ。

『こころ』は誤読されてきた。〈誤読〉というと、それとは別に〈正解〉があるみたいだが、そういうものがあるわけではない。『夏目漱石「こゝろ」を読み返す』(水川隆夫)を本屋で立ち読みすると、『こころ』論に定説のないことがすぐにわかる。全体の趣旨について議論が分かれているだけでなく、細部の解釈からまちまちなのだ。

ありがちな『こころ』の誤読の例を挙げよう。

三角関係に苦しんだこと、ありますか。

好きなひとといるのに不安になること、ないですか。

恋愛と結婚は別、とっていませんか。

そんなあなたに読んでほしい。

『こころ』

(新潮文庫編「文豪ナビ夏目漱石」)

『こころ』を読んでも、「そんなあなた」の悩みを解決してくれるヒントは見つからないはずだ。

まず、どうにも手の施しようがないのが「三角関係」という言葉だ。『こころ』には三角関係など語られていない。語られているのは、三角関係に入ることへの桁外れの惑いか何かだけだ。

この「三角関係」という言葉は、『こころ』の冒頭で「先生」と呼ばれている男（以下、〈S〉と略記）と、「遺書」で「御嬢さん」と呼ばれていて後にSの妻になる静と、Sの友人であるK、この三人の関係を指すものだろう。だが、彼らの関係を指して私は〈三角関係〉とは呼ばない。

簡単な話だ。あなたが二人の異性に付きまとわれているとしよう。そして、あなたはそのどちらのことも嫌いだとしよう。こんな状態を指して、〈三角関係〉と呼ぶのだろうか。呼ぶとしたら、大変なことになる。一人が付きまったら〈ストーキング〉と呼ばれるのに、二人が付きまったら〈三角関係〉と呼ばれるわけだ。こんなひどい言葉遣いを容認することは、私にはできない。横恋慕をしている人間は、三角関係の一員ではない。

私の考えでは、三角関係が成り立つためには、三人で二組のカップルが同時に成立していなければならない。つまり、一人が二股を掛けていなければならない。その人が既婚者で離婚したくてもできないでいるといった場合も、三角関係に含まれる。『それから』(N)の代助と三千代とその夫の間では三角関係が成り立っているようだ。しかし、『坊っちゃん』(N)の「赤シャツ」と「マドンナ」と「うらなり」の間で三角関係が成り立っているかどうか、まったくわからない。「赤シャツ」に対する「マドンナ」の気持ちが不明だからだ。『明暗』(N)の清子と津田と延子の間で三角関係が成り立っているという証拠もない。清子の気持ちが不明だからだ。『こころ』の場合、少女静の気持ちが不明だから、〈三角関係が成り立っていた〉と断言することは絶対にできない。反論したい人は、〈三角関係〉の定義を明らかにしてからにしてほしい。

実は、少女静の気持ちを詮索する必要はない。なぜなら、Sの主観では、三角関係は成り立っていないはずだからだ。彼が三角関係に加わることなど、ありそうにない。三角関係が客観的に成り立っていてもなお、彼はその事実を認めまいとしたことだろう。そのくらい、Sはプライドの高い人なのだ。この点を誤読する人は、『こころ』を読んだことにならない。どんな小説も自分の考えに引き寄せて読んでしまうのだろう。また、日常生活でも他人の気持ちを誤解してトラブルを起こしていることだろう、Sのように。

果たして御嬢さんが私よりもKに心を傾けているならば、この恋は口へ（ママ）云い出す価値のないものと私は決心していたのです。

（下34）

細かいところから検討しよう。「口へ云い出す」は意味不明。〈口に出す〉と同じ意味だと解釈する。「口へ云い出す価値のないものと決心して」は、〈口に出す価値のないものだから口に出すまいと決心して〉というふうに解釈する。

問題にしたいのは、「私よりも」という部分だ。この言葉は不要だろう。この言葉のせいで「心を傾けている」という言葉が意味不明になっている。

〈静はSに心を傾けていて、その角度をaとする。静はKにも心を傾けていて、その角度をbとする。a「よりも」bは大きいか、小さいか〉

こんな問題に意味があるのだろうか。気になる人は、図を描いてみるといい。いろんな図が描けてしまうのだ。

本文の「私よりも」は〈私ではなく〉などでなければ意味がない。語り手Sは、この種の否定の言葉を使いたくないのだろう。理屈では、「果たして」の文の前提には〈静はSに心を傾けている〉という文があるはずだが、この文の真偽は不明だ。Sは、この事実を隠蔽しようとしているのに違いない。

静がKとSを比較しているとしたら、静にとって彼らはまだ恋の対象になっていないのだろう。さもないと、静が二股を掛けていることになる。青年Sは静のことを〈二股をかける少女〉とでも思っていたのだろうか。そんなはずはない。ということは、静はどちらにも恋をしていないわけだ。このことは、静の主観とは関係がない。語られるSの考えだ。〈静はSをまだ十分に愛していない〉というのが青年Sの実感だったはずだ。恋愛関係が成立していないのだから、三角関係も何もあるわけがない。

本文は、次のように語られるべきだ。

〈「果たして御嬢さんが私」「に心を傾けている」のでないの「ならば、この恋は口へ（ママ）云い出す価値のないものと私は決心していたのです〉

これなら納得できる。要するに、Kとは関係のない話なのだ。Sは、自分が静に愛されない原因を静とKの関係に絡めて語ろうとして、そして、失敗してしまった。〈自分が他人に愛されないのは自分のせいではなく、誰かのせいだ〉と、当時のSは思いたかったわけだ。そして、その真相を語り手Sは隠蔽している。Sは〈自分は誰にも愛されないのではないか〉とっていて、語り手Sはそうした思いを隠蔽しているのだ。

なお、語り手Sは最終的に〈自分が他人に敬愛されないのは青年時代の過ちのせいだ〉という虚偽の暗示を行う。Sが静を含めた誰にも愛されない本当の理由は、隠蔽されているのだ。

「三角関係に苦しんだこと」のある「そんなあなた」も、〈自分は誰にも愛されないのではないか〉という心配を隠して恋人と交際しているのだろう。その一方で、〈本当に愛してくれる人〉の出現を心のどこかで待ちわびている。つまり、三角関係の準備をしている。ところが、そんな自分の気持ちを自覚しなくなって、それを恋人に擦り付けてしまう。〈浮気者は自分ではなく、恋人だ〉という作り話をして、自分は被害者を演じようと企む。し

かも、類は友を呼ぶで、「そんなあなた」の恋人も同様に三角関係の準備をしている。「そんなあなた」たちにとって、三角関係は不可避なのだ。

次の「好きなひとといるのに不安になること」というのは、どういうことだろう。舌足らずだ。どうして不安になるのだろうか。たとえば、〈自分は相手を恋人だと思っているが、相手は自分のことをただの友達としか思ってくれていないのではないか〉などと考えて不安になるのだろうか。あるいは、〈自分の本当の姿を相手に知られたら嫌われるのではないか〉と思うのだろうか。まあ、そんなところだとして。

しかし、『こころ』に、そんなありふれた不安など、描かれていない。勿論、〈描かれていないから関係がない〉と結論することはできないが、とにかく、Sが静といて感じる「不安」(下13)あるいはその作用などは不明なのだ。その「不安」が高じて、後にSは妻となった静を避けるようになる。また、死にたくもなる。ただし、そのようにはっきりと語られているわけではない。だから、静に関する事でSが何を悩み苦しんでいるのか、私には推定できない。「文豪ナビ」のいう「不安」がSのそれと同じものであるとしたら、その意味は、私にはわからない。

最後の「恋愛と結婚は別」というのは、何だろう。こういう言葉をたまに小耳に挟むが、何が言いたいのか、いつもわからない。

恋愛と結婚は同じじゃないよね。字が違うね。ほかに何が違うのかな？

尋ねても、答えてもらえそうにない。意味ありげな微笑が返ってくるだけだろう。

「恋愛と結婚は別」と男が言う場合、その意味はわからなくもない。彼はプレーボーイなのだろう。結婚しても妻以外の女と恋愛をする予定なのだろう。女が言う場合、彼女はプレーガールなのだろうか。そうかもしれないが、そうとは限らないようだ。〈結婚してしまったら男の愛は冷めるもの〉と悟っているのかもしれない。

これは余事ですが、こういう嫉妬は愛の半面じゃないでしょうか。私は結婚してから、この感情がだんだん薄らいでいくのを自覚しました。その代り愛情の方も決して元のようには猛烈ではないのです。

(『こころ』下34)

「こういう嫉妬」がどういうものなのか、この前を読んでもよくわからない。だから、なぜ、「こういう嫉妬」が「愛の半面」とされるのかも、わからない。「結婚してから、この感情がだんだん薄らいでいく」という話と「嫉妬は愛の半面」という話と、どういうふうにつながるのか、わからない。

ここだけを読んで、『鍵』(谷崎潤一郎)で描かれているような話を連想する人がいそう。『鍵』は〈嫉妬を愛情のスパイスに用いる〉という倒錯的な話だ。しかし、『こころ』に、そんなことはまったく描かれていない。そもそも、恋愛関係が成り立っていない相手に対して嫉妬をする権利はないはずだ。嫉妬をする権利は「結婚してから」獲得するもの

だ。

Sの主観では三角関係は成り立っていないのだから、三角関係にまつわる嫉妬が生じることなどありえない。実は、この「嫉妬」は静に向けられたものではなく、Kに向けられたものだ。

私はそれをKに対する私の嫉妬（しっと）に帰して可いものか、又は私に対する御嬢さんの技巧と見做（みな）して然るべきものか、一寸分別（ふんべつ）に迷いました。

（下34）

「嫉妬（しっと）」と「技巧」は、ともに意味不明なのだが、それぞれが別の物語に属していることだけは推測できる。同じ物語に属するのなら、二者択一の問題にはならない。「嫉妬（しっと）」と「技巧」は同時に働くからだ。「分別（ふんべつ）」の対象にはならない。迷うことすら無意味だ。

「嫉妬」と「技巧」は、本来、関係のないものなのだ。ところが、不思議なことに関係を持ってしまった。だから、「こういう嫉妬は愛の半面じゃないでしょうか」と、わざわざ語り手Sが付け加えているわけだ。

「嫉妬（しっと）」は〈KとSの物語〉に属し、「技巧」は〈静とSの物語〉に属している。Sの空想する少女静は〈静とKの物語〉をSに暗示するという「技巧」を用いたわけだ。

整理しよう。

I Sは〈静とKの物語〉を空想し、Kに「嫉妬」をした。

II 静は〈静とKの物語〉をSに暗示して「嫉妬」を煽るという「技巧」を用いた。

IもIIも、Sにとって好ましくない。

Iの場合、静はKを愛している。そして、SはKに敗北している。IIの場合、静はSを愛している。だが、同時に、静はSに愛されようとしている。このことがSには許せない。

Sの考えでは、〈Iが真実だから、IIは虚偽だ〉という結論になる。しかし、IとIIが二者択一である理由は、私にはわからない。どちらも真実、もしくは、どちらも虚偽である可能性はある。

Sには、奇妙な二者択一を拵える癖がある。そして、迷う。二者択一が成り立たないから、迷うこと自体がおかしいのだ。結論は決して出ない。

三角関係において、〈男は女に嫉妬し、女は女に嫉妬する〉と言われる。妻が浮気をする、夫は妻を憎む。これが〈男の嫉妬〉だ。夫が浮気をする、妻は浮気相手の女を憎む。これは〈女の嫉妬〉だ。この規則を適用すれば、男のSが〈女の嫉妬〉をしていることになる。おかしい。

別種の嫉妬がある。

それはどれも鉛筆で描かれたスケッチ帖であった。そしてどれにも山と樹木ばかりが描かれてあった。私は一眼（ママ）見ると、それが明らかに北海道の風景であることを知った。のみならず、それは明らかに本当の芸術家のみが見得る、そして描き得る深刻な自然の肖像画だった。

「やっつけたな！」咄嗟（とっさ）に私は少年のままの君の面影を心一杯に描きながら下唇を噛（か）みしめた。そして思わず微笑（ほほえ）んだ。白状するが、それが若し小説が戯曲であったなら、その時の私の顔には微笑の代り苦（にが）い嫉妬（しつと）の色が濃く漲（みなぎ）っていたかも知（し）れない。

（有島武夫『生まれる出づる悩み』二）

この「私」は作家で、「君」は画家だ。

私には、この種の「嫉妬（しつと）」の意味がよくわからない。〈他人の才能に嫉妬する〉というふうな言葉を聞いたり読んだりすることはあるが、いつも何のことだか、わからない。私の場合、才能のない人が褒められたり大金を稼いだりするのを知ると、腹立たしくなる。だが、才能のある人に対して「苦（にが）い」何かを覚えることはない。憧れるばかりだ。しかし、人によっては憧れが敗北感に変わり、被害妄想に変わり、「嫉妬（しつと）」に変わるのだろう。よくわからない。

Kに対するSの「嫉妬」がこの種のものだとすると、いよいよわからなくなる。SはKの何に「嫉妬」をしているのだろう。〈愛される才能〉だろうか。

「こうした嫉妬」を、Kに対する同性愛的なものとして誤読する人がいる。しかし、「こうした嫉妬」は、そんなありふれたことを暗示しているのではない。同性愛的要素を含むとしても複雑なものだ。そもそも〈嫉妬〉という言葉は複雑な感情を指すもので、人によってかなり違った使い方がされてきている。〈嫉妬じゃなくて、ただのやきもちだ〉などと言う人がいる。〈嫉妬と羨望〉というように並べて用いられるが、並べる理由はよくわからない。嫉妬する人は混乱しているのだろう。〈嫉妬〉はただでさえわかりにくい言葉なのだが、Nの場合、さらに輪をかけて難しい。「嫉妬」は、『こころ』に先立つ『彼岸過迄』（N）や『行人』（N）では不可解なものとして語られているが、この二作とともに三部作をなすとされる『こころ』では、〈皆様、すでにご案内のように〉という雰囲気は無造作に投げ出されている。この「嫉妬」は非常にややこしい。「明治の精神」と関係があるのかもしれない。

「愛情の方も決して元のように猛烈ではない」という報告がどんなことを示唆するのか、不明。〈愛情が冷めた〉というのではなかろう。〈愛情が安定したものになった〉とほのめかすのかもしれない。だが、S夫妻の関係は不安定だ。

要するに、私には『こころ』が理解できないだけでなく、こんな軽い調子の文句すら理解できないわけだ。

「文豪ナビ」のライターは、『こころ』を別の作品と混同しているのかもしれない。たとえば、すぐに思いつくのは『友情』（武者小路実篤）だ。

『友情』のあらすじは次のようなものだ。

〈野島と大宮は親友だった。野島は杉子に片思いをする。杉子は野島を嫌い、大宮を好きになる。野島の手前、大宮は杉子の気持ちを拒むが、やがて杉子を好きになってしまう。野島は杉子に結婚を申し込み、断られる。杉子と大宮は結婚する。野島は大宮と絶交する〉

『友情』でも三角関係は成り立っていない。野島はただのお邪魔虫だ。たまたま大宮の親友だっただけのこと。親友という設定も怪しい。野島は、自分が好きになったほど立派な女性と友人が結婚したのだから、喜ぶべきだ。〈自分は喜んでやるべきだ〉と思わないとしたら、野島の品性は低劣なのだ。しかも、野島には悪役としての魅力さえない。『金色夜叉』（尾崎紅葉）の貫一のように性格が歪みきっているのなら、まだ魅力がある。

『友情』は、〈友情と愛情を秤に掛けると、愛情が重たい〉というふうに理解されてきたようだ。しかし、〈だから、どうなんだ〉と私は言いたい。〈友情より愛情が重たい〉なんて、わかりきったことではないか。〈愛情より友情が重たい〉という話なら珍しいが、その反対だから別に面白くもおかしくもない。お邪魔虫を重要人物として設定し、普通のことを特殊なことのように偽装するのが日本の純文学の伝統なのかもしれない。

『友情』で起きたことが普通ではないとしたら、野島と大宮は両性愛者だったのだろう。その場合、〈友情か、愛情か〉ではなく、〈同性愛か、異性愛か〉という選択を大宮は迫られたことになる。そして、そのことに作者さえも気づいていないことになる。そうだとすると、この作品には重大な欠陥があることになる。

ちなみに、「『こころ』は男同士の恋愛を軸に展開する話とも読める」（『文豪ナビ夏目漱石』カバーから）という。「とも読める」というのは無責任だろう。〈桃太郎は宇宙人だった〉とも読めるし、〈坂本龍馬はフリーメイソンの一員だった〉とも読める。〈～としか読めない〉とか〈～とでも読まないことには意味不明だ〉などといってもらいたい。

そもそも、〈『こころ』や『友情』の作者は同性愛を隠蔽している〉といった解釈は、ちっとも面白くない。なぜなら、日本では同性愛はタブーではないからだ。隠蔽する必要がない。

秋の田の 穂向き見がてり わが背子が ふさ手折り来（け）り をみなへしかも
をみなへし 咲きたる野辺を 行き巡り 君を思ひ出 たもとほり来ぬ
（『万葉集』3943・3944）

作者は二人とも男だ。男同士で恋の歌を交わしている。冗談かもしれないが、冗談にできる程度には同性愛が許容されていたことになる。

武者小路の別の小説では、同性愛が何でもないのでさりと語られている。

自分はそれ迄に美しい男の子を私かに恋したことがあつた。しかし女を恋しく思つたことはなかつた。

(武者小路実篤『初恋』三)

同性愛はタブーどころか、強要されることすらあつたようだ。そうした様子が『キタ・セクスアリス』(森鷗外)でしつこく描かれている。『こころ』や『友情』では、隠蔽する必要のない同性愛について触れられず、しかもそれが「軸」になっているとすると、そうした作品は『キタ・セクスアリス』に比べたら不完全なものと評価しなければならない。

ちなみに、この作品にはおかしなところがある。同性愛の対象とされる少年いわゆる稚児が同等の扱いを受けていないのだ。彼は、マッチョな同性愛者と性的に未熟な取り巻きによって構成される「硬派」(同)の一員ではない。しかも、この稚児は、同性愛者ではなかった可能性がある。彼はレイプされていたようだ。ところが、語り手はこうしたことを軽視し、〈彼は両性愛者で淫乱だった〉というふうに批判的に語っている。この稚児は、成人後、男性的になろうと努めて女性遍歴を繰り返したらしい。あるいは、女性に対しても受身で、強い女に引きずられては捨てられていたのかもしれない。

南方翁も「攻玉塾のエピソード」として紹介しているが、それは学生が余所の寮か寄宿舎へ遊びに行つて「何をごちそうしようか。焼芋がいいか、少年がいいか」と尋ねられ、「少年を」と所望すると、早速、運動場から適当な下級生が引張つてこられて、客といつしよに布団蒸しにされる。しばらく布団の下でござそががあり、客は「どうもごちそう様」と挨拶して帰る例だというのだが、少年側に下地がない限り、そんな早業が出来たかどうか甚だ疑問である。しかし、この種の話は何処の中学校でも語り伝えられていたのである。

(稲垣不穂『男色考余談』)

「硬派」文化では、「下級生」は「下地」がなくても上級生に逆らえない。

仏教の文化においては聖なる者であるはずの稚児は、聖なる者であるがゆえに普通の人間ではないわけだから、「硬派」文化では人間以下の存在とみなされたらしい。

異性愛が「正常」で、同性愛が「異常」だなどというのは、近代以降の社会が作り上げた考え方にすぎないのです。しかも、稚児の場合、単純に同性愛とはいきれない複雑な問題を抱えているのです。「愛は平等」という近代的な恋愛観に縛られていた人は、「愛のかたち」がさまざまあること、しかしそれは決して常に対等なものではなく、時には搾取者と被搾取者の関係になりうるということを、心の片隅に刻んでおいて頂きたと思いま

す。

(田中貴子『性愛の日本史』)

『葉隠』(山本常朝)や『男色大鑑』(井原西鶴)などによると、前近代の日本では異性愛者こそ被差別者だったようだ。

「女色に溺(おぼ)るるは怯懦(きょうだ)に陥(おちい)る。男色は忠臣を作る利あり」

と、称した。綱吉は“人づくり”のために衆道(男色)を行なったことになっている。

(村松駿吉『話のタネ本 日本史』)

「硬派」は異性愛者を「軟派」(『キタ・セクスアリス』)と呼んで攻撃し、ときには暴力を振るう。

『地上』(島田清次郎)は、発表当時、異常な反響を呼んだとされる。私はその最初の部分だけを読んだ。「硬派」から力づくで稚児にされかけた少年を主人公が救い、その少年の幼馴染の少女と主人公が恋に落ちる。『地上』は〈「軟派」が「硬派」をやっつけて堂々と恋愛をする〉という日本で最初の作品だったのではないか。人気があったのは、そのせいではないのか。

『坊ちゃん』は〈「硬派」vs「軟派」〉の物語なのだが、その物語が隠蔽されているので、「赤シャツ」が悪者扱いされる理由はよくわからない。「丸刈り」らは、「赤シャツ」の被害者である「うらなり」あるいは「マドンナ」のために闘ったのではなく、「硬派」の大義のために闘ったのだろう。闘いの真の目的は隠蔽されている。

Nの小説には奇妙な関係の男二人がよく出てくる。彼らは「硬派」に属しているのであり、同性愛者ではなかろう。友情で結ばれているのですらない。互いを「硬派」の思想で縛りあっているらしい。相手が異性と恋愛をしないように監視しているみたいだ。『行人』の二郎と三沢の関係がそんな感じだが、例によって本文が意味不明なので、断定はできない。『ころ』では、「硬派」のKを「軟派」のSが軟化させようとしているが、実はSこそが自分の「硬派」的思想を始末できないで苦しんでいるようだ。そして、そうした真相を語り手Sは隠蔽しているらしい。

現在でも、女子会とか男子会とかいって同性ばかりで集まることのあるという。現在の日本でも同性愛は許容されている。むしろ、同性愛的な関係の方が重んじられるようだ。異性の恋人との初デートと同性の旧友との再会がダブルブッキングした場合、迷う日本人は多いらしい。その迷いには同性愛的な感情が含まれているのではなかろうか。さもないと、自分が相手の精神的な奴隷になっていることを自覚できないでいるのだろう。

必ずしも肉体的な行為を伴うわけではないが、日本人の大半は同性愛者のように観察される。同性愛的文化を拒否すると、日本ではまともに暮らせないのではないか。日本の小

説や映画の多くは、同性愛の隠喩として解釈することができそうだ。東映のやくざ映画における義兄弟の関係は、誰にでも同性愛のように思えるはずだ。だが、このように簡単に推量できるようなものと違い、微妙なものがある。『次郎長三国志』（マキノ雅弘監督）シリーズでは、清水の次郎長がお蝶との馴れ初めを語ってのろけると、子分たちに殴られ、やがてお蝶が死んでしまう。森の石松は、婚約するとすぐに殺されてしまう。愛し合う男女は幸福になれないことになっている。『男組』（雁屋哲＋池上遼一）の流全次郎は一時的に失明するが、たまたまその間に紅一点の涼子が振袖を着ることになる。彼女が洋服に着替えたら、彼の視力が戻る。しかも、彼は強くなっている。『第三の男』（キャロル・リード監督）を模倣した『霧笛が俺を呼んでいる』（姫田真佐久監督）では、主人公は友人を裏切った女を許さない。『第三の男』では女が恋人の友人である主人公を許さないのだから、正反対になっているわけだ。なお、小説『第三の男』（グレアム・グリーン）では、残った男女が仲良くなる。『赤いハンカチ』（舛田利雄監督）でも、主人公は死んだ友人の妻と愛し合っているが去る。この映画のラストも『第三の男』を模倣しているが、去っていくのは男だ。

欧米のインテリのまねをして〈同性愛者を差別しないのが世界標準だ〉みたいに思っている日本人は、日本のことをよく知らないのだろう。同性愛者差別は欧米の文化であり、欧米のインテリは自分たちの「軟派」文化を批判しているのだろう。一方、私たち日本人が捕らわれているのは「硬派」文化だ。自分が縛られているのではない鎖を切っても、自分は自由になれない。

妙な誤解をする人がいると面倒なので、ちょっとだけ付け加えておく。私は〈同性愛者を差別せよ〉と唱えているのではない。押し付けがましい人たちを恐れているのだ。男性同性愛者が増えることは、その分だけ女性が余る計算になるから、私としては喜ばしい。余った女性が私の方に来るとは限らないけれども、夢がある。

さて、「好きなひとといふのに不安になること」があるのは、「好きなひと」が異性だからかもしれない。日本には、異性といふと安心できるような文化がない。西洋人が異性といふと安心できるとしたら、恋愛や結婚が〈自分たちは同性愛者ではない〉というアリバイになるからかもしれない。

『友情』を同性愛が隠された小説として読もうとすれば読める。一方、『こころ』はどのような小説としても読めない。意味不明だからだ。この違いは決定的なものだ。『友情』の内容に関して批判することが可能なのは、『友情』が作品として完成しているからだ。〈彼らの友情も愛情も、食うのに困らない文化人どものお遊戯だよ〉などといった悪口を言うことができるのも、一応の意味がわかるからだ。〈『こころ』は劇団ひとりの演じるコントのようなものだ〉と、N嫌いなら言いたくなることだろう。つまり、〈自意識過剰の語り手ができもしない自己正当化を試み、汗だくになっているだけさ〉と言ってみたい。しかし、『こころ』はコントの水準にも達していないのだ。だから、内容に関していくら腐しても褒めたことになってしまう。

意味不明の表現に接するとき、私たちは既知の物語を連想し、それに当てはまるように工夫して解釈してしまいがちだ。予断、偏見、期待などをもとにして、他人の言葉を自分にわかりやすいように捻じ曲げて受け取ってしまう。「文豪ナビ」のライターは、『友情』か何か、その手の比較的わかりやすい作品と『こころ』を混同しているのだろう。『こころ』の自称理解者たちは、自分がかつて読んだことのある小説や自分の体験などを型として思い浮かべながら読み、そして理解したつもりになっているのに違いない。その際、既知の物語の型に合わせるために、情報を足したり減らしたりするのだろう。意味不明の箇所を勝手に削除したり描かれていない物語を補填したりして、異本『こころ』を頭の中で創作しているのだろう。つまり誤読している。そして、わかったつもりになっている。『こころ』は、そんな変則的な読み方しかできない不完全な作品なのだ。『こころ』だけではなく、Nの作品のすべてがそうだ。

『こころ』を解釈するために利用する既知の物語は、人によってさまざまだろう。だから、さまざまな『こころ』論が出現してきたのだろう。論者たちは、自分が型として利用している作品もしくは体験などをきちんと明示すべきだ。

4 意味のブランコ

『こころ』に描かれている事柄は暗そうだ。ところが、その語り口は、どことなく皮肉っぽい。ユーモラスと評しても過言ではない。ひょっとしたら作者は作中人物や語り手たちを道化として表現しているのではないか。そんな疑問が浮かぶほどだ。

妻の笑談（じょうだん）を聞いて始（ママ）めてそれを思い出した時、私は妻に向かってもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積りだと答えました。私の答も無論笑談話に過ぎなかったのですが、私はその時何だか古い不要な言葉に新ら（ママ）しい意義を盛り得たような心持がしたのです。

（下56）

「妻の笑談（じょうだん）」とは、「では殉死でもしたら可（よ）かろう」（下55）というものだ。なお、この発言が飛び出す経緯は不明。

「それを思い出した時」の「それ」は「殉死という言葉」（下56）だ。

「明治の精神」というのが、どうにもならない。この言葉は、この文の少し前に唐突に出てくる。しかも、その言葉を含む文も意味不明だ。

「もし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積りだ」という部分は、日本語になっていない。「するならば」→「積りだ」という構造は不合理。正しくは、たとえば次のようであればならない。

「もし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積り」にならなければならない

なぜ、Sはこのように語らないのだろう。「積り」ではない真の「殉死」の対象を隠蔽するためだろう。この対象が明示されなければ、「新らしい意義」の中身もわからない。

なお、〈Sは明治の精神に殉死をした〉と断定することはできない。その理由は二つある。一つは、〈「笑談」が本気変わった〉と断定するための証拠がないからだ。まったくないわけではないが、実に微妙。もう一つは、〈Sは自殺した〉という証拠がないからだ。

「無論笑談」というのはおかしい。なぜなら、静の発言には一応の意味があるが、Sの発言は意味不明だからだ。Sの発言は「笑談」にすらなっていない。あるいは、「笑談」の意味が特殊なのかもしれない。

『こころ』は意味不明で、まるで雲をつかむような話なのだが、〈文豪Nが伝達しようとしていた何かは少なくない人に伝わっている〉と考えられる。ただし、伝わった何かを誰にでも理解できる言葉で表現することは、誰にもできないようだ。できないのが正解らしい。その何かはNとそのファンが共有する「秘密」(下56)であり、彼らの「腹の中にしまつて」(下56)あるだけで、言葉にすることのできない状態にあるのだろう。Sと同様の袋小路に入り込んで出られずに苦しむのが正しい享受らしい。

私には理解できず、Nのファンには伝わっているらしい「明治の精神」は、明治限定の「精神」ではないと思われる。そうでなければ、現在、伝わるわけがない。そもそも、『こころ』の内部の世界においてさえ、その何かは終焉を迎えた様子はない。「明治の精神」の指す何かは、Nによってほのかに自覚されただけであり、見事に始末されたものではなからう。それは、『こころ』以前には主人公たちの心を守る盾として機能していたらしいが、『こころ』の後で執筆された『道草』(N)では重荷と感じられているらしい。さらに、その次の『明暗』では、それは主人公が病む痔のように、他人には滑稽だが本人には大変な苦痛を与えるものとして暗示されているらしい。

「明治の精神」の指すそれは、明治が始まる前に誕生し、Nに意味不明の言葉を綴らせ、意味不明のNの言葉を吸収して肥大し、後に続く多くの人にも意味不明の言葉を語らせ、書かせてきた。Nを混乱させたそれは現在の私たちをも混乱させていると思われる。

「明治の精神」とは、「自分の品格を重んじなければならないという教育から来た自尊心」(下16)のことかもしれない。だが、この言葉もまた意味不明だ。Nが明言せずに表示しようとして失敗した何かを、私たちは〈それ〉と呼ぶしかない。

Sの「笑談」は「妻の笑談(じょうだん)」とは異質なものだ。「妻の笑談(じょうだん)」の真意は推理によって知れる。だが、Sの「笑談」は違う。言葉の意味が本義と皮肉の両極を行きつ戻りつ、ふらふらとブランコのように揺れている。Nの言葉は、しばしばこのブランコ状態に入り込む。

Nは〈意味は曖昧であるべきだ〉と思っていたのかもしれない。「定義を下せばその定義のために定義を下されたものがピタリと糊細工(のりざいく)のように硬張(こわば)っ

てしまう」(N『現代日本の開化』)などと意味不明のことを語っている。

文豪N伝説を信じるのなら、〈それ〉を他の言葉に置き換えることはできないのだろう。いや、できたとしても、してはならないのだろう。タブーだ。意味は曖昧なままにしておかなければならない。Nの言葉の意味を明示することは、原作を作り変えることに他ならない。

しかし、伝説を疑うのなら、輪郭と思しきあたりを点線でなぞるぐらいのことはやっておかなければならない。

『菊と刀』のルース・ベネディクトなら、〈それ〉を「ハジ」と呼ぶかもしれない。だが、普通にいう恥とは少し違うようだ。

耻(はじ)を搔かされるのが辛いなどと云うのとは少し訳が違(ママ)います。

(下34)

基本的には「耻」なのだが、少し違う何かが〈それ〉だ。

九鬼周蔵のいう「いき」(『「いき」の構造』)が〈それ〉に近いのかもしれない。要するに〈島国根性〉の一種だろう。日本に特有の文化、たとえば〈恥の文化〉というものがあるとして、それが何らかの理由で「神経衰弱」(N『現代日本の開化』)のようになったものが〈それ〉だろう。

明治の終わり、〈それ〉に突き動かされて殉死した人が何人もいたようだ。日本人は〈それ〉に操られて他国を侵略し、無鉄砲な戦闘を継続し、敗北したのだろう。立ち上がる時にすぎた杖も〈それ〉だったのかもしれない。現在でも、〈それ〉のせいで自殺する人は少なくないのかもしれない。晴れた空の下にいて私を不意に滅入らせるのも、〈それ〉だろうか。

智に働けば角が立つ。情に棹差せば流される。意地を通せば窮屈だ。とにかく人の世は住みにくい。

(N『草枕』一)

この意味不明の文章は、次のような文章の略記だと思われる。

〈余のそれが余の智に働けば、自画自賛をしたことになり、角が立つので、余の面目が立たない。余のそれが余の情の流れに棹差せば物事が順調に進むかと思いきや、意外にも流れに棹を取られてしまい、余の智は余の情という小舟に乗せられたまま、いずこへともなく流され、余は自暴自棄となり、赤っ恥をかいて、余の面目は丸潰れとなる。余が面目を改めようとして、それに支配されて意地を通せば、智も情も消えて自縄自縛となり、余は窮屈だ。余は、そのせいで、とにかく人の世は住みにくいと思う〉

〈それ〉は善でもなく、悪でもない。〈それ〉は、自分が頭の中で育んできたものに違いないのだが、押し付けられたように感じられる何かだろう。〈それ〉が力を発揮するのは、〈それ〉が正体不明だからだ。言葉にならないから、言葉では始末できない。〈それ〉は「耻」と名付けられることさえも恥じて逃げ回り、迷える子羊となり、薄暗いじめじめとした自分の生まれた場所にもぐりこみ、指しゃぶりの延長のような言葉を並べることによって延命を図ってきたらしい。今後もそうする魂胆だろう。

〈それ〉が、「明治の精神」のようなもったいぶった言葉ではなく、誰にでも納得できる言葉で表現される日が来るまで、私の憂鬱は晴れそうにない。

私のN批判の原動力も、〈それ〉なのかもしれない。

5 私は読者を選ぼう

私が本当に批判したいのは、Nでもなく、『こころ』でもない。意味不明であるはずのNの言葉を理解可能なものとみなし、なおかつ、他人にもそのように信じさせようとしてきた人々の全員だ。その中には、Nの人生観その他を勝手に捏造した後、それを批判してみせた人も含まれる。私自身も除外できない。意味不明の言葉を誤解してしまうのは、避けがたいことだからだ。

私がNだけを批判しないのには、わけがある。発信者の限界というものを考慮するからだ。発信者がいくら苦心しても、意味は受信者の気持ち次第で決まってしまう。受信者が正直に〈意味不明〉と返信しなかったのなら、発信者は〈あれで通じるかなと心配したけど、大丈夫みたいだ〉と思って安心してしまう。安心する側よりも安心させた側により重い責任がある。〈これは、あれにそう言ってやれば、何とかなるから〉に〈わかりました〉と答えて結果的に発信者の意図とは異なる仕事をしてしまった場合、その責任は答えた側にある。

そもそもの責任は著者であるN個人にあるわけだが、最終的な責任は〈Nの作品は理解可能だ〉と宣伝してきた人々にある。また、そうした宣伝に対して疑問を投げかけなかった人にも何がしかの責任はある。Nの言葉を日本語として十分に通じるものとみなす人には、その意味を明確に説明する義務がある。その義務から逃れられると思っている人を、私は徹底的に批判したい。けれども、そういう人たちの名前を挙げて批判していたらきりが無い。だから、〈文豪N伝説を批判する〉というスタイルを採用する。

さて、ここまで書いてきて、この先、どのように話を進めたらいいのか、迷う。

迷い続けて数年が経過した。

Nの言葉に違和感を抱いたことのない人に向かってどんなに説明しても、私の主張は理解してもらえないと思う。情けない反応も予想される。〈おまえの言うことにも一理あるが、やはり文豪Nの言葉は明瞭だと思うよ〉といった反応だ。〈本当は好きなくせに〉みたいな、

くだらないことを言いかけられるかもしれない。こんな連中を私の読者として思い描くの
なら、私は底なし沼に落ちたも同然だろう。

Nの言葉に違和感を抱かない人はいるのかもしれない。だが、〈Nの言葉の意味は明瞭だ〉
と本気で思う人がいるとは、私にはとても思えない。〈Nの言葉の意味は明瞭だ〉と主張す
る人は嘘つきか、さもなければ、〈言葉〉や〈意味〉や〈明瞭〉といった言葉の意味が、私
の知っているものと違うか、二つのうちのどちらかだと思う。どちらにせよ、〈Nの言葉の
意味は明瞭だ〉と主張する人を説得する力は、私にはなさそうだ。

仕方がないからジャンプすることにした。

ジャンプ！

どうやら、私の知らない日本語を操る集団が存在するらしい。その集団のリーダー格の
一人がNだ。その集団を〈言語的N派〉と仮称する。ただし、〈Nは言語的N派の総帥だ〉
と言いたいのではない。総帥は不明だ。そんな人物は実在しないと思う。

言語的N派は、Nのファンだけで構成されているのではない。Nの思想なるものを批判
した人も含まれる。本音を漏らせば、私は反N派に加わりたかった。だが、彼らの言葉も
Nのものと同様にしばしば意味不明なので、げんなりした。〈思想的反N派〉も、その実態
は言語的N派なのだ。〈Nの言葉から何らかの思想を読み取ることができる〉と
思っている人は、その思想をどのように評価しようとも、言語的N派に属する。

思想的N派に対する思想的反N派の攻撃は何度か試みられてきたが、功を奏さなかった。
思想的反N派の空想する〈N派 vs 反N派〉の闘いは、コップの中の嵐でしかありえないか
らだ。反N派は言語的N派なので、とどめを刺せない。とどめを刺すのは、いわば自殺行
為だ。両者は同じ穴の貉だから、〈思想的N派・思想的反N派〉と書き分ける必要はない。
以下、合わせて〈N派〉と略記する。

N派に属さない人を〈言語的非N派〉と呼ぶ。〈非〉という文字を使うのは、〈言語的反
N派〉というものが成り立たないからだ。意味不明の言葉には、賛成はもとより反対もで
きない。以下、〈言語的非N派〉を〈非N派〉と略記する。

誤解のないように付け加えよう。〈非N派〉という集団が存在するわけではない。これを
正確に記述すれば、〈非・N派〉だ。

非N派の人は、Nの作品の前でたじろぐ。彼らは、日本人とは限らない。日本語を使っ
て仕事をしている外国人も含まれる。一種の義務感から『坊っちゃん』や『草枕』や『こ
ころ』などに目を通したことはあるが、感動したことはない。〈自分の人生にとってNの作
品は不要だ〉と
思っている。ところが、日本で生きてると、あるいは日本人と交際する
と、Nのことがたまたま話題になり、妙に肩身の狭い思いをする。彼らは、N派の存在を察
知しているが、その存在に名前を付けようとはまでは考えない。N派を敵に回したくないか
らだ。面倒なので、〈N派なんか存在しない〉ということにしておきたい。お札の肖像に使
われたとしても、ほとんどの日本人にとって樋口一葉がどうでもいい作家であるように、
Nもその程度の人物だというふうに思っていたい。

文豪N伝説に背を向けようとして夢想されたのが、〈有名な作家の一人にすぎないN〉という伝説だ。かつて私はその伝説の信者だった。〈Nの言葉を敬したふりして遠ざけていれば何とか生きられる〉と思い上がっていた。ただし、N派の言葉は非常に邪魔に感じていた。N派の言葉が理解できなくて、日本語の勉強をやり直そうとしたことがある。ところが、文豪N伝説にぶつかり、頓挫してしまった。

日本語の勉強が初級から中級に進むころ、Nの言葉が出てくる。言うまでもなく、それは理解可能なものとして紹介されるわけだ。頭がくらくらする。

以上の私の話が理解できて、いくらかでも似たような体験をしたことのある人は、非N派だ。

私は、非N派のために仕事をしよう。

N派をのさばらせている責任は、非N派にある。N派が俺様気分浸りに浸ってられるのは、非N派が〈意味不明〉という声を上げてこなかったせいだ。常識人である彼らが沈黙してきたせいで日本語は使いものにならなくなった。

現在、日本語は英語に取って代われつつあるらしい。近い将来、日本語は方言のような地位に下落することだろう。雑談にしか用いることができなくなる。すでに社内公用語なるものが英語になってしまった会社もあると聞く。表向きには〈国際化の波に対応する〉といったことが理由として挙げられているようだが、国際化だけが理由ならば優秀な同時通訳ロボットの発明を待てば済むことだろう。〈N派の日本語は、どんなに優秀な翻訳ソフトによっても処理できそうにない〉というのが本当の理由なのではないか。

Nの言葉がしばしば意味不明であることぐらい、小学生でもわからなければならない。ところが、小学生にはわからないことがたくさんあって、〈ちょっと勉強すればわかるようになること〉と〈ちょっとやそつと勉強したぐらいではわかりそうにないこと〉の区別がつかない。そうした分別のない年頃に『坊っちゃん』のような奇妙なものを読まされると、日本語に対する信頼を失ってしまう。その結果、日本の小説が嫌いになるのなら、まだ頼もしい。逆に、わかったつもりになるようだと、危ない。〈言葉の裏に秘められた精神をつかんだ〉などと思い上がり、そのまま中学生になって『こころ』を読んでわかったつもりになり、Nのもの以外の本を読んでもそういう〈つもり〉を作り出しては自慢し、〈つもり〉を作り出せない人間を軽蔑し、差別し、排除しようとする。自分が知ったかぶりになるだけでなく、他人にも知ったかぶりであることを期待し、ときには強要しさえする。

高等学校を卒業した人であれば、〈高等学校を卒業した程度の知識では、Nのどんな小説も理解できない〉ということがわからなければおかしい。ところが、大学を卒業しても、N派は〈いつか、わかる〉という少年時代の印象をもとにして〈いつのまにか、わかった〉という記憶を偽造してしまうらしい。評論家や研究者になっても、その偽造記憶を正当化するようにしか読めないらしい。ちなみに、Nの小説の主人公たちも、しばしば、この種の記憶の偽造をやっているようだ。N派には記憶偽造癖があるのかもしれない。

とにかく、N派はちゃんと読んでいない。

そもそも、ちゃんと読もうとしていない。

とびとびに転読して、わかったことにしてしまっている。視線はすべての活字の上を滑走したのかもしれないが、意味は理解できていない。表面的な意味を理解しようとせず、隠された意味を勝手に想像して、作者の意図を理解したつもりになっている。本文の意味は理解できないくせに、文豪Nの意図は理解できるらしい。こういうのを〈超能力〉という。

ありもしない意味を捏造するために多種多様の文豪N伝説が用意されている。N派は文豪N伝説を信じているのにすぎない。いや、信じているふりをしているだけだろう。信じようとすれば、きっと疑いが生じる。疑いが浮かばないように、信じたふりをするだけにとどめているのだろう。また、他人にも同様の態度を取らせたいのだろう。

Nの作品において、用いられている語句の意味はしばしば明瞭ではない。特殊な意味があるようだが、それを推定することができない。同時にその語句を含む文が日本語としてまっとうな構えをしていない。また、その文の前後を読んでも、不備などを処理するためのヒントが見つからない。要するに、何が何だか、さっぱりわからない。〈これは日本人の書いたものか〉とさえ疑う。まずい翻訳、誤訳のように思える。

〈誤訳〉というのは、ただの冗談ではない。〈Nの頭の中に古文と漢文と欧文と江戸弁と喃語と造語などをごちゃ混ぜにしたような言語があつて、Nはそれによつてものを考えていた〉と仮定し、その言語を〈N語〉と呼ぶことにしよう。N語でできた文章がNの頭の中にあつたとして、それを当時の未完成の近代日本語に翻訳したものが、私たちの前にあるNの言葉だ。この場合、N語による脳内原作がまずいのか、近代日本語による翻訳がまずいのか、判断できないわけだが、原作がまずい場合、その旨を明示する義務が翻訳者にはあるのだから、Nがその義務を果たしていない以上、彼は責任を免れない。

6 自分語の世界

ルー大芝にルー語があるように、NにN語がある。こうした言語もどきを総称して、〈自分語〉と呼ぶことにする。

ある著名なエッセイストが、テレビで次のように語るのを聞いたことがある。

〈自分の都合でいろんな意味に使える言葉、つまり自分語をいくつかもっていると便利です。後から発言の不備を指摘された場合、いくらでも言い逃れができるからです。私はいくつかそういう言葉を持っています。それを取り替え引き返して話をし、ものを書くのです。皆さんにもこのような自分語をもつことをお勧めします〉

驚いた。詐欺師が仲間内でこういう秘法を伝授することはあつても、公言する人がいるとは思わなかったからだ。テレビ局がこんな話をどういうつもりで流したのか、そのこと

もわからなかった。

『ネル』（マイケル・アブテッド監督）のヒロインのネルは、幼いころから監禁されていて、独特の言語を編み出した。救出されたとき、ネル語は誰にも通じなかったが、やがて翻訳可能になる。だから、ネル語は自分語ではない。一種の方言だ。ただし、ネル語は翻訳可能になるまで言語とみなされなかった。どの言語とも似ていなかったからだ。ところが、N語は日本語や中国語に似ている。ルー語は日本語や英語に似ている。だから、言語と誤認される。ところが、どうやら言語ではなさそうだ。言語に似た感傷の表出らしい。ルー大芝はルー語によっていわば故郷喪失者の悲哀を訴えていると思われるが、NもN語によって悲哀や怨恨などを表出しているようだ。

自分語は誰にも理解できない。自分自身にさえ理解できないはずだ。N派は、自分語一般を尊重しているだけだろう。彼らも彼らなりの自分語を操るからだ。

三四郎は富士山の事をまるで忘れていた。広田先生の注意によって、汽車の窓から始（ママ）めて眺めた富士は、考え出すと、なるほど崇高なものである。ただ今自分の頭の中にごたごたしている世相とは、とても比較にならない。三四郎はあの時の印象をいつの間にか取り落としていたのを恥ずかしく思った。すると、

「君、富士山を翻訳して見（ママ）た事がありますか」と意外な質問を放たれた。

「翻訳とは……」

「自然を翻訳すると、みんな人間に化けてしまうから面白い。崇高だとか、偉大だとか、雄壮だとか」

三四郎は翻訳の意味を了した。

（N『三四郎』四）

人々は広田のいう「翻訳」の意味が理解できるのだろうか。私には理解できない。私だけが理解できないのだろうか。ついでにいうと、三四郎のいう「意味」の意味も不明だ。

自分語がネル語や隠語や方言のような言語であるためには、それを理解できる人がいなければならない。『三四郎』の内部の世界において、広田のいう「翻訳」の意味は三四郎に通じたわけだから、これは広田の自分語つまり広田語ではなさそうだ。ところが、私には「翻訳」の意味が理解できない。どういうことが起きているのだろう。

『三四郎』の内部の世界において「翻訳」は広田語なのではないか。「三四郎は翻訳の意味を了した」という文は、〈三四郎は翻訳の意味を了した〉と勘違いした〉という文の略記ではないのか。あるいは、〈三四郎は翻訳の意味〉ただし三四郎語でいうところの意味「を了した」という文の略記かもしれない。

他人との接触を絶たれたネルは、架空の人々と語り合うことによって、幼児語からネル語を作り上げた。ネルにとっての架空の人々は、現実に生きている人々と容易に置き換わる。幼児語は、現実の誰かとの間で通用していたものだからだ。つまり、基本は同じ。し

かし、自分語は現実の他人を空想的に排除する目的で創出されたものだろう。基本が違う。ところが、『三四郎』では、通じるはずのない自分語が通じてしまうわけだ。この矛盾は、『三四郎』以降徐々に露呈し、『こころ』では明らかな障害となる。

先生の談話は時として不得要領に終わった。

(上31)

Sの談話が意味不明なのは、SがS語を使うからだ。ところが、Pは〈S語はSが隠蔽している物語において確かな意味をもつ〉と「直感」(上06)によって仮定する。〈この仮定が正しかったことは「遺書」によって「証拠立てられた」(上06)〉というふうにPは語る。しかし、私の観点では、「遺書」は「証拠」として採用できない。なぜなら、「遺書」もS語で語られているからだ。Pの抱いた「不得要領」という印象は「遺書」によって払拭されたいが、私の感じる意味不明という印象は「遺書」によってむしろ増大する。

『こころ』の作者は自分語の限界を悟ったと思われる。『こころ』に続く『道草』(N)では語り手や作中人物になるべく自分語を使わせないようにしているようだ。ところが、そのせいで、文体がグロテスクなものになっている。

筋道の通った頭をもっていない彼女には存外新ら(ママ)しい点があった。彼女は形式的な昔風の倫理観に囚(とらわ)れるほど嚴重な家庭に人とならなかった。政治家をもって任じていた彼女の父は、教育に関してほとんど無定見であった。母はまた普通の女のようにやかましく子供を育て上げる性質(たち)ではなかった。彼女は宅(うち)にいて比較的自由的な空気を呼吸した。そうして学校は小学校を卒業しただけであった。彼女は考えなかった。けれども考えた結果を野性的によく感じていた。

(N『道草』七十一)

〈生硬〉というのは褒めすぎだろう。意味不明。要するに、〈彼女は両親から無視されて育ったので自分勝手だ〉といった話らしい。「考えた結果」というが、誰が「考えた」のか、不明。

『道草』の語り手は周到に言葉を選んでいる。このことは誰にでも察せられよう。だが、言葉を選ぶ理由までは推量しがたい。〈彼女の両親は反目していた〉という真相が隠蔽されているらしいが、これを隠蔽する理由は不明だ。Nの個人的な事情を読み取ることは可能だが、作者がその事情にこだわる理由は不明だ。

自分語は、明示したくない物語を暗示したつもりになるための言葉だ。その使用を制限すると、明示したくない物語がいわば空白として露呈する。つまり、情報不足が明らかになる。

実際ここに貴方という一人の男が存在していないならば、私の過去はついに私の過去で、間接にも他人の知識にはならないで済んだでしょう。

(下02)

SはS語で語っている。調子がいいから、情報不足があまり気にならない。だが、意味不明なのだ。

「実際」は副詞で、この文に含まれた言葉のどれかを強調していると思われるが、それがどれなのか、私には確定できない。「私の過去」は〈「私の過去」の体験〉の略のようだが、「他人の知識」という言葉を考慮すると、〈「私の過去」の体験から私が得た「知識」〉の略のようでもある。「間接にも」というから、〈「私の過去」が直接に「他人の知識」になる〉という場合があるはずだが、それは具体的にどんな場合だろう。〈会って直接話す〉ということだろうか。そうだとしたら、本文はあまりにも硬い表現だ。どうして、こういう表現になるのだろうか。

始(ママ)めは貴方に会って話をする気でいたのですが、書いて見(ママ)ると、却ってその方が自分を判然(はっきり)描き出す事が出来たような心持がして嬉しいのです。

(下56)

「出来たような心持」は回りくどい。「却って」は宙に浮いている。「嬉しいのです」は、この文の前半と照応しない。話題は「会って話をする気」なのだから、この話題に決着をつけるべきだ。たとえば、〈会えなくて「却って」よかった〉など。本文は、〈SはPと直接「会って話をする気」にはなれなかった〉という真相を隠蔽しようとしてしどろもどろになったものらしい。

「遺書」は、「先生は何故私の上京するまで待ってられないだろう」(中17)というPの疑問を解消するための役に立たない。〈Pと会えば、「自分を判然(はっきり)描き出す事が出来たような心持」は見事に吹っ飛ぶかもしれない〉と、語られるSは予感しているのだろう。嬉しくない予感だ。また、その予感を語り手Sは隠蔽している。Sは、彼の空想するS語圏内で、彼にとって都合のいい聞き手Pだけを相手にしていたいわけだ。〈「ここ」はS語圏内であり、PはS語に習熟している〉という設定があるのに違いない。

〈自分の分身のような聞き手を空想し、それを騙しにかかる〉というのが、N派のスタイルだ。いわゆる自己欺瞞。そのスタイルについて、「物を解きほどいて見たり、又ぐるぐる廻して眺めたりする癖」(下03)と語られている。

N派が発生したのは、漢文の書き下しが広まったときだと思われる。

たとえば、「朋あり、遠方より来る」(『論語』)というのは、日本語としていかにもまずい。このまずい日本語の文によって〈孔子様の思想を感得せよ〉と強いるのは、理不尽だ。

ところが、N派はこの理不尽な要求に応じてきた。いや、応えるふりをしてきた。中国語を学ばず、言語の壁を無謀にも飛び越えて自分語に翻訳し、賢人の思想を勝手に空想してわかったつもりになってきた。しかも、同門の空想の中身を確認もせず、他人の解釈をさらに自分語に翻訳したつもりになって理解に代えてきた。

N派は烏合の衆なのだ。意見が異なるのではない。勿論、同じではない。そうした区別をするための言葉がないわけだ。議論が成立しない。だから、結局、あるがままを容認するしかない。思想的に保守を選ぶのではない。事なかれ主義に陥るだけだ。だが、やがてそれすら通用しなくなるときが必ず来る。すると、キレてしまう。行け行けどんどんで、部外者を攻めまくる。負けたら腹を切る。

ある西洋の哲学者は、自分の生きがたさ、息苦しきの元凶をキリスト教に求め、これを批判した。ところが、日本には宗教のような思想的桎梏が存在するわけではない。〈天皇制〉という言葉があって、これの指すものを元凶とみなす人がいるが、この言葉に確かな意味はない。〈空気〉という言葉もある。〈空気〉では、あまりにも茫洋としている。〈天皇制〉や〈空気〉といった意味不明の言葉で何かを語ったつもりになれるのがN派の特徴だろう。元凶はNの言葉に類する〈曖昧な表現〉にあると私は思うが、〈曖昧〉という言葉も曖昧だから、やはり何かを明言したことにはならない。

何とも名状しがたい、もぞもぞ、ひりひりする感じ。日本的なのかもしれないが、東洋的なのかもしれない、もしかしたら世界的なのかもしれないような、微妙で痛切な不安。それをN自身もつらく感じて生きていたのだろう。彼も、他人の言動の真意が察知できずに苦しんだ。ところが、彼はそうした不安を始末できなかった。始末するどころか、逆に撒き散らしてしまった。彼は彼の苦痛をいかなる方法によっても表現することができなかった。表現しようとすらしなかった。表現するのではなく、共感を求めた。人々に不安や苦痛などを共有してもらおうと企んだ。その企みは、かなり成功した。その結果、彼の抱いていた不気味な何かは、日本の文化の一部となったようだ。

7 隠蔽された物語

Nの言葉は彼の苦痛その他の結果であると同時に、私の苦痛の原因なのでもある。生身のNは、おそらく誰もがそうであるように、自分よりも強い人の犠牲になり、弱い人を犠牲にして生きたのだろう。ところが、文豪Nは、ただの加害者だ。Nの作品を読んで救われたような気がしている人も、加害者として私の前に立ちただかっている。私が批判したいのは、加害者Nとその同類、その思想的敵をも含めたN派なのだ。

私は寂寞（せきばく）でした。何処からも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような気のした事も能（よ）くありました。

こういう言葉を読むとき、私こそ「何処からも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような気」になる。

と、このように述べれば、N派にも私の苦痛の幾分かが伝わるのかもしれない。だが、逆に誤解されそうな気もする。

苦虫を嘔み潰したような人の顔を見ると、こちらまで不愉快になる。共鳴しているのではない。同情しているのではない。まったく違う。その人の横柄な態度が不愉快なのだ。

まず、「寂寞（せきばく）」がわからない。ある風景を指して〈寂寞〉というが、自分の「気」を指して〈寂寞〉というのはおかしい。

次に、「何処からも切り離されて世の中にたった一人住んでいる」という言葉の意味がわからない。この「何処」は「世の中」に属するのだろうか。属するとしたら、無意味だ。この「何処」は「世の中」の外部にあるとしか考えられないが、その場合、この「世の中」そのものが「何処からも切り離されて」存在していることになる。つまり、「何処からも切り離されて世の中に」という部分は、〈「何処からも切り離されて」いる「世の中に」〉の不適切な略と解釈せねばならない。

語られるSは、いわゆる疎外感を抱いているらしい。その程度のことは、私にも察せられる。だが、だから何だというのだろう。珍しくも何ともない。しかも、常に疎外感を抱いているのなら病気かもしれないが、「能（よ）くありました」というのだから、疎外感にさいなまれないこともたまにはあるわけだ。だったら、普通じゃないか。

語り手Sは、何を語りたいのだろう。いや、何を語りたくないのだろう。

「切り離されて」というのが怪しい。これは具体的にどのような状態をいうのだろう。この言葉は比喩なのではないか。本文は、〈「何処からも切り離されて」いるような「世の中にたった一人住んでいるような」〉の不適切な略なのではないか。ただし、何の比喩なのか、不明。〈何の比喩なのか〉という疑いを聞き手Pに抱かれたくないで、Sはわざとおかしな言葉遣いをしているのだろう。

人間はあらゆる「何処」とも接触しているわけではない。「寂寞（せきばく）」が生じるとしたら、特定の「何処」かとの連絡が不通になった「ような気」がするからだろう。その「何処」とはどこなのか。

今引用した部分は、静とSの不和について語られた後、唐突に出てくる。ということは、この「何処」は静の心の「何処」かのことなのだろう。語り手Sは、三つの体験を意図的に混同して語っているらしい。

- I 原因不明の「寂寞（せきばく）」体験。
- II Kの死がきっかけで抱くようになった「寂寞（せきばく）」感。
- III 静との不和が引き金になって反復される「寂寞（せきばく）」感。

語り手Sは、IIがIIIの原因であるかのように語る。だが、彼は虚偽の物語を暗示してい

るのだ。ⅡはⅢを強調するものに他ならない。本来の原因はⅠにある。Sが語るべき物語はⅡではなく、Ⅲなのだ。『こころ』の本筋はⅢであるはずだ。ところが、Ⅲを語ればⅠが思い出される。Ⅱは、ⅠとⅢを切り離すための物語にすぎない。〈ⅡだからⅢだ〉という虚偽の物語を暗示するのは、Ⅰを隠蔽するためだ。Sが切り離されたくないと願っている「何処」は、どことも知れない空間なのだ。そこは、単純に考えれば、母の懐だ。語られるSは分離不安を引きずっているのだろう。そして、語り手Sはそうした真相を語るまいとしてがんばっているわけだ。

隠蔽された物語は、「迷信の塊」（下07）や「恐ろしさの塊り」（下36）として自覚される。知覚と認識の通路みたいなものが絶たれて、〈自分の感じていること〉が凝固したようになり、経験しつつあることが即座に過去の体験となる。「化石化」（下36）してしまう。物語が隠蔽されて体験の記憶しかない、物語の印象が執拗に残ってしまう。その印象の適否を反省するための物語がないからだ。なお、これらカタマリ系の言葉も意味不明だ。〈迷信の塊〉というと、普通は〈迷信に凝り固まった人〉のことかと思う。「恐ろしさ」が固まるというのも、おかしい。

Ⅰ－1 幼児Sは保護者から切り離された。

Ⅱ－1 少年SはKに依存していたが、Kから切り離された。

Ⅲ－1 青年Sは静の母を養母のように慕う。そして、彼女の息子になるために静と結婚する。ところが、静母子二人がかりでも、成人Sを保護することはできない。

「遺書」が隠蔽しているのは、こうした物語の全部だろう。Ⅱ－1とⅢ－1に直接の関係はないのに、語り手Sは、それがあつたように暗示している。

語り手Sは、虚偽の物語を暗示する。彼に堂々と嘘をつく度胸はない。なお、〈嘘〉とは、その真偽が判定できる程度には意味のある言葉によって構成された物語のことだ。

真相を暗示するとき、私たちは察しの悪い人をあらかじめ対象から外し、意味が成り立つことを優先させる。伝達に失敗することは想定内だ。その表現は、自分の理想とする受け手のためになされる。いわゆる自己満足が目的だ。表現さえ残っていれば、理解者がいつか現れることだろう。そんな夢を見ている。ところが、虚偽の物語を暗示する場合、伝達に失敗したら元も子もない。だから、何とかわからせたい。ところが、わからせようとすれば、語るに落ちるといふ結果になりかねない。したがって、しかたなく、話を中断してしまう。結局、意味ありげな表現にとどまる。自己欺瞞は中絶することになっている。

よくできた無害な嘘を〈小説〉という。『こころ』は小説だろうか。『こころ』が小説らしい小説であるためには、作者は語り手Sの虚偽の暗示について批判的に描いていなければならない。そうではないのに『こころ』を〈小説〉と呼ぶとしたら、私たちは小説の概念をかなり拡張しなければならない。

(続<)